



0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 11 12 13 14 15

始



特 220
312

片桐龍子著



か
み

忠誠婦徳會發行





著者片桐龍子

大家庭 姫かゝみ目次

序文	一
總論	七
君國と臣民	七
宗教と家庭	一一
政治と婦人	二〇
教育と母	二五
愛の殿堂	三一
御稜威の光	三一
君國を守る人々	三三
營舎の友垣	三七

夕映えの丘 五六

意外な面會者 六三

同胞愛 七八

國家の干城 九二

一旦緩急あれば 一〇一

故郷の花 一〇八

心の誓ひ 一一二

縁は神の御心に 一二二

女の力 一二五

義理に堰かれて 一四一

生みの父 一四四

教への母 一四七

女の道

金か真心か 一五五

活眼開かれて 一八九

慈愛の腫輝けば 一九九

實は結ばれて 二〇八

婦人衛生 二一一

月經とその手當に就て 二一二

結婚 二二一

配偶者の選擇 二二四

結婚の準備 二二七

性病に就て 二三三

夫婦和合の秘訣 二三九

養老	二四六
家庭衛生	二五三
家事經濟	二七一
妊娠	二八六
胎教に就て	二九〇
産前の心得	三〇二
出産	三一二
産後の心得	三一八
子女の教育	三二六
慈悲の恩寵	三三三
亡き母の佛	三四三
追憶の涙	三五〇

生きぬ仲	三六〇
父歸る	三七三
天に哭く	三七七
星の莫城	三八二
姉戀し	三八五
二つの命	三九二
親なき人々	四〇四
祖母を慕ひて	四一七
父の形見	四二八
慈愛の瞳	四四三
培はれ行く愛	四五四
唯祈る心	四五六

祖神に詣でて	四五九
神か人か	四六一
導く者はそも誰ぞ	四六五
夜光の怪	四七三
興國の民	五一二
御稜威の光	五一二
民の務め	五一五
今後の世界	五二三
祖國を守れ	五二五
信仰と迷信	五二九
人格と作法	五三七
高尚なる趣味	五四〇

知能の働き	五四七
蓄へよ徳と財	五五〇
國法を守れ	五五六
眞の美人	五六一
幸のみの人生	五六六
法の道	五七二
教への庭	五七七
改正しかりせば	五八二
天職を尊べ	五九一
星の花	五九七
祭の夜	五九七
嵐の朝	六一三

人の情 六一七

悪魔は微笑む 六二五

純情 六三三

都に憧憬れて 六四一

千鳥ヶ濱 六六〇

里ごころ 六七〇

君が胸に 六七七

晴れ行く空 六八六

里に咲く花 六八八

筆を擱くにあたりて 六九一

家庭 大學 姫かゞみ 目次 終

序

地上人類の生活は、時代と共に變遷して、止ることはありません。

海に陸に空に、充滿された各種の文化の華に、人は酔ひ疲れて、氣力朦朧として、正しき人生の道をさえ、踏み誤つて、秩序も日に月に亂れて、その多くは神の子としての、尊き神聖の光は地に墮ちて、世界に漲る文化の反面たる、暗黒面に悩む現在の世相を眺め、幾百年幾千年遠き、神代の祖先の昔の歴史に溯つて、古きを尋ねる時、餘りにも時代人の生活状態の異なるのに驚かされます。

太古は木を磨擦して、火を求め、それに依つて煮炊のわざも行はれ、闇の夜半もこの火を燈芯に移し、油で燈して、光を得ました。

雷から電氣を發明し、水力に依つてそれを起して、大地を不夜城とするといふ様な
 不思議な世界、二本の線路の上を、汽車や電車が、素晴らしい早さで走つたり、飛行
 機が大空を鳥の様に雄飛して、無限と信じてゐた地球を、數へる程の時間で一周した
 り、世界の端大陸洋上幾千里を隔て、その肉聲を聞く事の出来るラジオが出来るこ
 いふ様な、神秘不可思議な時代が、後の日に來るであらうとは、古人の何人も、夢に
 だに思はなかつたでございませう。

開闢以來幾億幾萬幾千年間、永い古來の私共祖先は、朝に起きて大地を耕し、夕べ
 に星を戴いて、心身を淨め、己が住家に歸りては、家族相集り相和して、焚火を圍ん
 談笑に耽り、薄暗き孤燈の下に、安らかな夢を結び、病なき身と朗らかな心境で依つ
 て、行く年も來る日も、心から土に樂しみ、人我共に純眞眞面目さを信じ合ひ、律義
 を守り之を尊びつゝ、我が住む里を天國と信じて、他に世界あるを知らず、餘裕綽々
 嬉々として、飽く事なく、祖先から子孫へ次々に同じ業を繰返して、共に人の世に生

き榮えて、何の不自由も不満も感じなかつたのであります。

さうした時代相を思へば、全く懐しい思ひが胸に迫ります。
 その昔、京大阪へ江戸から旅立ちするには、家内と共に水杯を汲み交して、泣い
 て別れて、幾日幾時紺の脚絆に草鞋をつけて、數へ切れない程の山河を超えて、旅の
 宿りを重ねつゝ、身の縮むほどの危険を冒して、漸くその目的地に到着したのであり
 ます。

何程親しい肉親の間柄でも、海山遠く離れては、お互の思ひを交す便利とはあり
 ません。我が思ひ夢に通へど念じて見たり、大空の月や星に訴へて見たり、又空飛ぶ
 鳥を呼びかけたりする様な、遺瀨ない思ひを、これ程の人が繰返したでせう。

その時代も他所に、今は電信電話、汽車汽船等、その他あらゆる交通通信の機關は
 發明され、それを超越して、世界人と語る、ラジオさえ出來た今日を思へば、昔の人
 達に一度、この文明開化な世の有様を、見せて上げ度い、充分にと味は、せて上げ度

いよいよ様な感じが致します。

が又一方昔の人が、今の世に直面されたなら、吃驚仰天して、見度くない、聞き度くない、矢張り昔が懐しい、幸福であつたと、言はれるであらうと信じます。

文化の華が世界に咲き誇つても、朗らかな温い清い、純真な人情の華の枯れ萎んだ怖ろしい今の世には、生き苦しいと、叫ばれるでせう。

文化満開の今の世と、自然生活の昔と、何れが地上の人に幸を齎したか、それはその人に依つて見方は違ひませうが、昔の時代も、人情に今の文化の華を咲かせ、昔の祖先の豊かな、清い人情の華を、今世に移し植ゑて、兩立させたなら、世の中は、如何ばかりうるはしい天國となつて、人類社會をうるほした事でございます。これを観すれば、天地の大自然から燃え出づる人情の華が、文化の華を抱かなければ眞の地上の樂土は望み得られません。

世相は遷り變りましても、古今萬世大地の滅びざる限り、人ばかりでなく、森羅萬

象を生み養ひ給ふ大氣、分りよく申せば、太陽、空氣、水土は、人に依つて之を作り又消滅し、増減する事をなし得ない、絶對的存在で、神の御所有であります。

この自然大氣の御力の中に、萬物は養はれてゐる事を思へば、自ら學理と自然の力といふ事が分る道理でございます。

自然は愛であり、又正であります。

これがために、この自然の眞理である、愛と正義を人の生活に失つた場合は、假令化學に依つて満開しても、文化の華は、地上人類の生活をうるはず、幾干の効果もない冗花となつて終ひます。

この眞理をよく承知して、人間のために、與へられた特權を重んじ、一切を眞理の生活に歸つて、根本から人の地上人類の生活の様式を改め、一切を眞理に即して、生活を営む事が出来たならば、今の世のあらゆる行詰つた難問題は解決されて、忽ち地上は、文明の華と人情の華が、交々枝葉を交へて繁り榮え、豊かな實を結んで、

天地相和して、幸の殿堂を築く事が出来るのであります。

今や世界的に思想經濟問題に悩み、その國策のためには、各國共に焦つて居ります。我が國に於ても、滿洲問題の解決、世界各國との對立といふ様な事柄で、外患の苦惱あり、國內には思想經濟の頽廢に依り、内憂の悩み深く、それがために、之が改善策として、萬策を講せられつゝあります。

けれども何れの施設も、殆ど一時姑息の枝葉の手入れに等しいものでありまして、その根本に溯つて、英斷的に眞理に即した改善の行はれないのを悲しく思ひます。

この社會現在觀に依つて、眞に今後の人類生活の理想世界を開拓する事を念願として天地の神に念じて、懸命の祈りの中に著述したのが、この書でございます。

非常時局に直面せる今日の社會家庭の根本改革のために、多少役立ちますならば、祖神の御惠徳の現はれとして、著者の光榮これに過ぎたることはございません。

昭和八年初秋

著者 識す

總論

君國と臣民

地球上に住む人類が十八億あり、世界に國と名づけてゐる國家が、六十ヶ國餘りあるのでございます。

その何れの國に致しましても、古來建國の始めから、人類の總べてを超越したる帝王に依つて、統治されてゐるといふ由緒深き歴史を持つ國は、一つもございません。

然るに我が大日本帝國は、世界各國と、國體の淵源を異に致しまして、その大御親は、天地山河と共に草木發生と時を同じうして、現はれませる、

伊弉那岐伊弉那美の大神に依り、生れ出でたる祖先を有し、二柱の大神の、無限に尊き御靈に依つて現はれませる、

天照皇大神を、至上と仰ぎ讃へ奉り、仕へ奉りて、祖神大神様の御惠徳を畏み畏みて、地上人類の受けて生きて行くべき、種々の種つ物を始め、食べ物着物の業を弘め、種を收穫し、治く御天業を翼賛し奉りました。

天孫御降臨の時は、天祖大神様には、畏くも

三種の御神寶と、五穀の種つ物とを天孫に授け給ひ、

「畏くも天孫は、太陽と同じ地の王たり。

宜しく誠と正義と力を以て地上を治め、樂土を建設して、神の子たる人類の生活をうるはし、森羅萬象を愛で、之に依つて、幸ひを無上に受けよ。」

この御神意を受けて御降臨になりました。

私共の祖先は、等しく祖神の御命を受けて、天孫に仕へて、地球上に天降り、以來、天業を翼賛し奉つて、代々の天孫に仕へ奉り、

君は民を子の如く慈しみ給ひ、民は大君を父として仰ぎ奉つて、親しき敬愛の中にも、常に上下一體となつて、天祖の御惠徳を畏みつゝ、國體の精華を發揮して参りました。

我が國體と皇室の尊嚴は、あらゆる世界の宗教を超越したる、莊嚴絶比に在します、眞理の御存在であられますので、如何なる學説も宗教も、我が國體と皇室の御尊嚴に、些かの異論をも試みる事は許されませぬ。

故に我が國では、君國と國民は一心同體でありますために、常に一乗の生活でありまして、君國を離れて國民なく、同時に國民を離れて國家は存立が出来ません。

實に廣大にして麗はしい一國を一丸とせる、家族制度の國家でございませぬ。故にその國家の安寧幸福を支持して、理想樂園として、同胞相寄り相集つて、共に

理想の生活を營まんと致しますのには、一家に老幼男女共に助け親しむ如く、國家に於ても、上下を問はず、男女老幼を問はず、貴賤貧富の區別なく、常に真心を一にして、一國の民にして、

大君の赤子たることを忘れず、共に自己の天職に對して、責任を重んじ義務を盡し、共存共榮の實を收めて參りますことに、忠實でありましたならば、どれ程世の中が進歩して、文明開化の御代になりましても、獨り一部分の者のみの獨占とはならずして何時の時も天の恩恵として、平等に民草の上に浴せられ、物質文化は精神文化としての人情の華の中に開き薫り、實を結ぶ事が理想でございます。

世の中は人情の華だけでも、薫り薄く、文化の華のみでも實は結ばれません。この兩者の華が平等に開き薫り交つて、始めて地上に樂土は建設が出来るのでございます。

過去神代時代に溯り、祖先の足跡を振り返つて見凝めると共に、現状の國家社會相

を正視して、飽迄誤れる文化と、名にのみ誇る毒の華を根を絶やして、その最もよきを培ひ育て、久しきに涉つて取残された精神文化の種を、國民の真心の中に植ゑつけ、これを養ひ育て、うるはしき大和撫子として、その薫りは高く麗はしく、祖國日本をうるははしめるのみならず、彌が上にも世界人の真心の種となり、根となつて、世界人をして、我等の御親の神は、東の國日の出づる日本國である事を知らしめ、精神の華と光りと、心の華の薫りは日出づる東からといふ認識と、無上の歡喜に浴せしめ、大君の御稜威を、地球上に遍く照らさしめる様に、天業を翼賛し奉るのが、この日本の國に生れた臣民の、私共の眞の使命であるのでございます。

宗教と家庭

凡そ地上に生命を受けて、天地間に生活して居ります、野獸類、鳥類、昆蟲類等、

總べての生物は、自然に與へられた個性に依つて、本能に生きる力は非常に不思議な程、強い力を持つて居りますが、宗教といふものは、絶対に持つてゐないのでございます。

然るに人類の世界では、色々な宗教がありまして、形式は千差萬別であります。自分以外の何ものかを信じ、それを信念として、生きてゐます。

若し宗教を持たないものがあるとしたら、それは野獸鳥類と、何等選ぶ所のないもので、その心持に、何等確固たる信念がありませんために、その一日の動作も、眼前の事のみには囚はれて、殆ど本能に依つて、行動を行ひますために、人の道に外れて、世に言ふ人面獸心に等しく、人としての姿は持ち乍ら、人間價値といふものは、絶対に現はすことが出来ないで、淺問しくも野獸に等しい様な生活を、知らぬ間に繰返し繰返し人間としての價値なき一生を送らねばなりません。

人にして君を尊び國を愛し、祖先父母を敬ひ、人類と親しみ、諸々の物資を尊ぶ心

は皆之大御親に報ゆる、深い信仰心から來るものでありまして、若しこの麗しい信仰心がないとしたならば、君國祖先社會人類物品などに對する、有り難い勿體ないといふ様な、報恩感謝の念といふものは起りません。

この報恩感謝の念がなければ、禮儀作法といふ事は、その心に形に現はれて參りませんから、前人とか物品とか、場所柄といふ様なことの區別はかまはず、ごんな粗相なことも遠慮なくするのでございます。

それは丁度道ばたの不潔な叢に戯れてゐた蠅が、王者の冠へ、汚れたまゝで舞上つても、誰もそれを咎めることは出来ません。

蠅自身は王者の冠であるといふ事も、それがために遠慮しなければならぬといふ事などは、頭から考へてゐないのでございます。

これと同じ様に、信仰のないものは、無遠慮で、不知々に不忠となり、祖先父母に叛き、神佛の存在さへも知らずに、我儘勝手な事を口走つたり行つたりして居りま

す。けれどもそれは、魂が人間外に墮ちて居りますために、恩を感じるといふ心眼が開けてゐないからでございます。

人は萬物の靈長として、極めて廣汎な自由の力をお與へ下さいまして、様々な物理化學的の學理を、進んで學ぶ力も之を應用する事も、笑ふ事も喜ぶ事も譲ることも愛する事も、憎む事も奪ふ事も、滅ぼす事も育てる事も、争ふ事も相和する事も、必ず陰と陽の兩面づつを、與へて試みられて居ります。

さながら獸類、鳥類、魚類、昆蟲類の個性を、一つの器に集めた様に、百面相を現はし得るのが人間であります。

その人間が、この幾多の個性を恣に發揮して働きかけましたら、何と騒がしい、醜惡な怖ろしい場面を出現するか、想像するだに戦慄を覚えます。

けれども尊いことには、神様は人間にこれ程の自由をお與へになられました上に、この複雑なる萬物雜居の動物園の様な人類の雜念の中へ、眞理といふ神の眞心をお授

けになつてあられますために、人は自然の生活をしてゐる間にも、誰から教へを受け導かれたといふ事もなくして、善を好み、惡を憎んで、繰返しく之を行ふ中に、惡は正義と慈悲のために、自然に消滅されて、雜念は絶えて、その後は善根のみが、勢よく伸び榮えて、その人の目に口に手に足に満ちて、外部に働きかけて、世の光、國の光ともなつて、神の御心を地に現はす立派な人格を越えて、神格の人も幾多世に現はれるのでございます。

それと全く反對に、何となしに善を好まず、惡を好んで、残忍な業を好み、嘘偽りを繰返して人を欺き、人を責め苦しめて、他の者の苦しみをみて、喜ぶ様な性質が自然に伸びて參りますと、遂には善根が根絶やしされて、惡が全身を占領して、申分のない惡魔となつて、親を苦しめ、君國に仇なす様な、野獸よりも、幾倍か罪を犯して生き乍ら奈落の底へ墮ちる人も澤山ございます。

これを思ひましても、眞の宗教が世に榮える時は、人心鎮まり、國は安らかに治り

ますが、宗教の靈火が消え沈んで、世に豊かに光らず、その輝きなければ、人心癡痺して、獸性の世界に墮ちて、人類社會を擧げて、罵詈、争鬪相次ぐ、修羅の巷と變つて終ひます。

丁度今の世は、誠の宗教の靈華は、その薰りを滅して、法の光を失ひました。それがために人の心は、暗黒の世界に迷つてゐる姿でございます。世の人を暗黒界から、大光明の人間界へ呼び返すには、信仰といふ法の燈火が世に現はれなければなりません。

その燈火は、何處にあるかと申しますと、各自の家庭の中に秘められて居ります。各自の家庭の中に、信仰があれば、その光は社會國家に點し出されます。家庭の信仰は、個人から始ります。

故に個人の發生の源である、父と母とのお互に愛し愛され、無限に神を尊び、祖先を敬ひ、君國を尙ぶといふ、清き尊き純真な一心同體の人格的靈肉の間に、植ゑ付け

られて發生した、小さな魂と肉體とが圓滿に、母胎教育に於ける第二の天性、出生後における第三第四の天性に依つて、世に働きを起すものでございます。

この方法で自然の道を理想的に辿つて、世に強く放つ靈光は、順調な道でございますが、この外に第三第四の天性は、不幸にしてその人の個性を淨めて光りを放たしめる力なく、却つてその天來の個性を妨げるやうな、極惡な垣根となつて、神性を固く閉ぢ込めて終つて居りましても、偶然の出來事に依り、假令惡事に疲れ果て、その惡性が幾分衰弱し、癡痺しかけた時、又は外部に鞏固な垣根を洩れて、眞理の聲がその魂に響いた時、直ちにその良心は起ち上り、惡性雜念をかき分けて、眞理と合します。

この時に惡根忽ちにして滅して、一舉に善性に立歸り、奈落の世界は轉換して、心の樂土が眼前に浮び、今迄憎み呪つてゐた人も、總べての者も皆懐しいものに變つて直ちに身も心もその中に和し、報恩感謝の境涯に入つて、無限な光を天地に仰いで、

人生を讚美しつゝ、自己も又人の世の光りともなつて行く程の人もあります。

これは逆境に依つて得た靈の光であります。

何れに致しましても、絶對的に純眞な信仰なくして、人は正しい朗らかな生活を營む事は出来ません。

それがために家庭と社會を、絶對的の樂土として、無上の天國に等しき喜びを以て共に感謝しつゝ、進むためには、毎日肉體に三度の食を求めて、その骨肉を養ふと同様に、間斷なく精神の養ひとして、信仰に親しみ、限りなく自然の御胸に親しみ感謝して正しき人の道を辿らなければなりません。

世に神佛と區別し、又何派といふ様な宗派を分つて、自己の宗教を禮讚し、他宗を排撃する様な宗教もありますが、かういふのは眞の宗教ではなく、邪教でありましてかゝる宗教を信すれば、心境が偏頗となつて、人格を失墜する虞れがあります。

殊にその源は神に依つて發生し、神統連綿として彌尊く榮え君神一體の我が日本國

にありましては、尙一層國民の信仰的信念は、人に依つて弘め出された、枝葉の宗教にこだはつて、迷信に陥ららず、各派の宗教を超越したる眞理、祖神の大御心を、國體及び國民の信念として、一すぢに天地を通ずる眞理の法道を進まなければなりません。

世の宗教家は、今や著しい文化に先んじられて、その威信は地に墮ちて、徒らに法衣を纏つてはゐましても、自己に信仰的信念なく、形式的文化に引摺られて行く様な姿になりました。

かゝる弱點に乗せられたために、敬神崇祖の國民的信念を阻害され、

皇祖天照大神様への參拜を拒ましめる様な、邪教がはびこる時代となりました。

これを権力や一時の力で壓迫しても、却つてその枝葉を摘むのみで、いよく幹を太らせ、根を張らさせるばかりで、何の効果もありません。

邪教を滅するには、絶對的に正しくして、天地の眞理に合する、信仰的大信念に依

つて、之が偉大なる靈火の光に照して、これを消滅しなければなりません。
 宗教界の威信失墜が、如何ばかり國體を危機暗黒に導き來りしかを認識して、世の宗教家は等しく起つて、その祖神の御胸に立歸り、眞の靈火を受け、之を高く掲げ振り翳して、世の人の心を正しく直く照し導かなければなりません。

政治と婦人

世の中には政治と婦人とは、何の關係もない様に考へてゐる人々が少くありません。ために若し婦人參政運動などをする婦人を見ると、何となく變り者の様に思はれてゐる様な傾向もございますが、これは大變な誤りでございます。さりどて濫りに時代を考慮せず、婦人參政權問題などを唱へて、騒ぎ廻るといふ様

な輕率な行は慎しむべきことでございます。

政治と婦人そのものは、密接にして、決して離れる事の出来ない重大な關係を持つてゐるといふ事を、充分に知つてゐなければ、今後の家庭の主婦としても又母としても、又自分一人としても、正しく義務責任を果して行く事は出来ません。

例へて申しますと、日々お勝手に主婦が取扱つて居りますお米、又味噌や溜等の調味料を始め、衣服等その他總べての物皆、税金のかゝつてゐないものは一つもございません。

中には實際の品物の原價よりも、税金の方が多くかゝつてゐる様な品物も澤山ございます。

お酒などはその例で、醸造元の原料は僅かですが、税金が高いので、消費者には夥しい負擔となります。

煙草などもその通りで、原價は本當にお話にならない程僅かの實費で出來すのに

その幾倍といふ間接税を納めて、高價なものを買つてゐるのでございます。

尤もお酒や煙草といふ様なものは、一般國民の生活必需品ではなく、嗜好品に屬するもので、一つの贅澤品になつて居りますのみでなく、多量に用ひますと、心身の健康を害する虞れがありますので、一般國民に節制させる方法として、かうした高い税金を徴收されるのでございます。

それでも尙お酒と煙草の消費高は夥しうござりまして税額も數億に上ります。

これを見ましても、直接國税を納めない人が、間接には毎日驚く程の納税を納めてゐるわけでございます。

この外何を調べて見ましても、税金のかゝつてゐないといふ品物はありませんから家庭の主婦は、餘程政治を理解して、家庭生活や子供の教育といふ様な、どうしても缺く事の出来ない品物に、意外に多くの税金が課せられて居りはしないかといふ様な

事も知つておかねばなりません。

又今日のように外國品がどしどし輸入されて、全國の家庭に入り込んでゐますのでこれを婦人が何の考へもなく、不注意に消費しますと、總て國家は、外國品を多く輸入超過しまして、日本のお金は外國へ流出して終ふ事になります。

又子女の教育の事でも、日常學校で用ふる教科書その他の教材などでも、澤山種類があるのでございますが、それが果して子供の教育上、健全なる心身を發達させるために、有効であるかといふ様なことも、婦人が常に考へて、萬一缺陷があれば、これを補つて行かなければなりません。

その他農業方面商業の事、交通通信機關等の事でも、皆直接間接家庭生活や子供の教育等に關係がござりまして、政治と婦人の生活は、深い密接な因縁關係を持つて居りますから、今後の婦人は、常に政治的知識を取入れて、深い理解を以て、注意を拂ひ、適當に處置して行かなければなりません。

男子と女子と體格性格の異なる通り、天職も變つて居りますから、各自にその求むる理想も、變つた點があるのでございますが、今日迄は政治といふ事は、殆ど男子が取扱つて、その意志のまゝに、行つて來られました。婦人の方面の立場といふものは、大體は想像酌量して、決められた規則で支配されて居りますので、幾多の無理解なものがないではございません。

さりとてこれを俄かに改正する必要があると言つて、一部分の理性に富んだ女性が參政權を叫んで、その法律の改正を迫られました。簡単にこれの改正が行はれるものではありません。

これは婦人の眞の自覺と、知徳の向上發達に依つて、その婦徳の光りが世に現れ、彌が上にも男子は女子を重んじて眞心を以て相對しなければ、誠の政治が行へなくなる。正しい時勢が必ず近き將來に來るのでございますから、私共日本女性は、國體の由來をよく奉じて、飽迄謹慎し、婦徳を涵養して、浮華輕佻な外國婦人等を學

ぶ事なく、日本婦人としての、優しく強く雄々しき、聰明なる、良妻賢母の實を修めて自然の力に依つて、婦徳の實を擧げる事に年々心がける事が大切であります。

宗教の頽廢、教育の形式化、政治の腐敗墮落等を、悉く洗禮して、眞に國家の光とするためには、今後婦人の純眞な力に俟つ外はございません。

私共は國家の現狀に鑑みて、永い間の惰眠からさめて、眞理の世界相に目覺めて、奮起しなければなりません。

教育と母

世の多くのお母様方の中には、自分の子供の教育を、學校でのみ受けるものゝ様に、單純に考へて居られる方が、可なり多いと思ひます。

これは甚しい誤りでございます。

小學校は確かに幼き子供に、智能を授け學問を教へ導くものでございませぬけれども現在の日本の教育制度は、學級の編成に於ての組立、大抵一組五十人以上を一學級としてあります。

西も東もまだ分らない様な幼な兒五十人を、守りをするだけでも先生としては、可なり骨が折れますのに、それを次から次へと行儀を仕込んだり、智能を授けて行くといふ事は、並や大抵の骨折りはありませんから、これ位この指導と取扱ひに骨を折られます事か分りませぬ。

その中を一人々々の個性までも調査して、その性質に適當した方法で、指導して行かうと、随分苦心されて居りますけれども、ごんな聰明な先生でも、その子の根本の個性まで造り直すことは、絶対に出来るものではありません。

それは宛ら松を檜に變へやうとしても成らず、梅は櫻とは變へられぬ様に、ごんな

に力を入れて磨き上げてても、鐵は鐵で、金や銀に變へる事は出来ませぬ。

その通り、個性が個人の臺となつて、出てゐる性質の枝葉に教へ導き、よき花を咲かせ實を結ばせることは出来ても、個性から來る花以外には、決して咲くものではありません。

以上を思へば、學校教育のみで、教育の理想を完成しやうといふ様な考へは、全然間違つて居ります。

如何程資産家で、小學校から、中等學校、専門學校大學迄進ませて學ばせましても、矢張り個性が悪ければ、香りの高い美しい花が咲いたり、實が成つたりするものはなく、油斷することその幹は蝕ばまれて、實のない花となつて、空しく散る様な事も少くありません。

眞に心身共に剛健にして、國寶の様な子女を、世に生み出すためには、名譽も地位も資産も何の役にも立ちませぬ。

眞に正しき子女は、正しくして圓滿な家庭の、純眞な母の體內から生れ、しかもその靈肉は、母胎に宿る瞬間から、驚くばかりの力で、成育して参ります。

その母の健康と、信仰、趣味、習慣、教養、禮儀、作法、動作等が、悉く胎兒の健康に信仰に人格に品性に、深く影響して、重大な第二の個性となつて、世に出て参ります。

しかしてその母を中心として、家庭の環境信仰等あらゆる兩親始め、その他の家族の感化を受けて成長致しますために、第三第四の個性が、次々と作られて行くのでございませうから、世のお母様は、子供の教育のためには、何としても七八割以上の責任があるわけでございませう。

そのあとは周囲の事情、學校教育、社會教育が、これを補ふのであるといふ事を考へましたならば、世の若き婦人は、年のみ成育したことや、衣類調度品といふ様な、形式的なもの、調つたといふ事のみを以て、結婚の準備が完成したといふ様な、誤れ

る考へを改めて、結婚はよき嫁となり、よき妻となり、よき母となつてその實を收め得る資格を十二分に養ひ納めて、その責任を完うするのに大丈夫といふ確信を得なければ、嫁に行く資格はないといふ事を、よくよく自覺して、従來の誤れる習慣を改めて、専ら心身共に健やかな自己を完成し、向上せしめて、婦人としての正しき責任に向つて、次々に人間にのみ與へられたる未開の寶庫を開拓して、家庭に社會に無上の平和な樂土を築く様に努力しなければなりません。

これが昭和維新以後に於ける、我等日本婦人の務めでございませう。

以上各項に涉つて述べました様な、理想を極めて分りよく説明して、自然の間に一般常識となり、知識となり技能となり、又深き信仰となつて、親愛なる同胞が世に尊く生きて頂き度いといふ念願のために、本書を編纂致しました。

理論的に説明致しますと、窮屈を感じ、興味を失ふ事を思ひまして、全部の理想を三つの小説に織込んで、内容の重なる主人公に依つて説明させて頂きませうことを御諒

解下かいくださいまして、各項かくこうに渉わたる一言一句いげんいっくの言葉ことばもよく噛み占めて味は、れ、妙味めうみと滋養じやうを御吸收ごきふしゆくた下さいます様、切せつにくくお願ねがひ致いたします。

愛の殿堂

御稜威の光

皇國こうこくの運命うんめいを賭たして戦たたつた、日露にちろの戦争せんそうも、神國しんこくの大日本帝國だいにほんていこくの威力かりきに依よつて、滿洲まんしゅうに充満じゅうまんして、あらゆる傍若無人ぼうじやくぶじんに横暴わうぼうを極きめて、東洋亞細亞とうようあじやの平和へいわを攪亂かくらんしてゐた露國軍ろこくぐんを撃滅げきめつせしめ、陸海軍りくかいぐん相呼應あひこたうして、旭あさひの御旗みはたを大空おほぞらに掲かげて、日本萬歲萬々歲にっぽんばんざいばんざいの聲こゑは、世界せかいの何處いづこに迄までも轟とんき渡わたつて、東洋とうようの一小島國せうたうこくとして、それ迄まで迄までは世界せかいの國々くにくに

にその名も充分知られなかつた日本が、一躍して世界の強國に列し、國威をいよ／＼世界に輝かしつゝ、文化に教育に經濟に、世界の強國と相交つて、いよ／＼國力を増進し、世界戦争後は、英米二大強國と列して、東洋を代表したる文明強國としての榮冠を得て、御稜威は赫々として地球上に輝く我が國の皇紀二千五百九十二年即ち聖代昭和七年は世界各國の干涉喧々轟々たる中に、東洋亞細亞平和のため、又世界人類最後の福祉を信念として、九月十五日には後日の萬難を覺悟して、滿洲國の建國を承認し、世界人の眼を瞠らしめ、一方滿洲國へ出動された皇軍は、大寒大暑を物ともせず新興滿洲國の良民を惱ます、不正馬賊匪賊を討伐して、廣漠果しなき廣野を、縱横無盡に駆け巡つて、大和男子の威力を恣に振つて、敵を戰慄せしめ、世界人を怖れしめ、風雲急を告ぐるの豫感も逐次

祖神の御守護と陛下の御稜威と、皇軍の武力が一丸となつて、大地を打つ時、その威力天に漲り溢れて、東洋の空一面に被ひかぶさつてゐた、怪しい雲は遠く彼方へ散

亂して、東天から赫々とした太陽の光が、東洋の大地を隈なく照し初めました。

このよき年の秋十一月の三日、明治節の日、近衛騎兵隊では、嚴かな閱兵式が行はれました。

その御儀も目出度く終つた午後、自由な外出を許されたまゝに、軍人達は三々五々氣の合つた同志の友を誘ひ合つて、喜びに溢れ、日の御旗輝く、東京の町を、あちらこちらへ出て、心に委かせて、東へ西へと散つて行くのでした。

君國を守る人々

日露戦争が終つて、三十年近い間、世界戦争の影響を受けて、幾度か出動する事はありましたけれども、大戦の渦巻に巻き込まれなかつた爲に、世は比較的穩やかで

隣邦支那の内亂も他所に、日本では砲火の轟きもなく、平和の氣は漲つてゐました。この間に思想經濟も驚くばかり變動して、好況の波が打寄せて、黄金を全國民に浴せて歸つたかと思ふと、間もなく國民はこの濁流に溺れて、無我夢中で、大地から足を浮かせて、好況風に乗つて、空に躍ると見る間に、數年を出でずして、再び押寄せて來た嵐は、先の黄金を洗ひ流し、津波は怖るべき日本國民の肉を涸らし、眞心を奪ひ去る様な、怖るべき毒液を残して、歸りました。

これに依つて國は漸次不況に喘ぎ乍ら、思想の頹廢、肺病性病の蔓延等に惱まされ、極度に國體の精華は蝕まれ始めますと、君國を守る重い任務にある陸海軍の人々の尊重にして、且嚴肅なる存在をさえ輕んずる様な傾きが生じ、日本の威力を減少せんとする、歐米人の怖るべき謀計に乗せられて、重大な國防機關迄も、縮少されんとして國內の輿論喧々轟轟として起り、これが爲に殖民地の權益に迄及ばんとした時、

天地神人共に、怒つて突如として、滿洲事變を捲起しました。

國家の現状と、歐米人の策謀に、悲憤慷慨して、忠君愛國の至誠全身に漲つて、強く足踏みして、手に汗を握つてゐた、皇軍の威力は振り起り正義の羽は、明晃々として抜き放たれ、天に代つて、不正を討ち世界人に日本魂を知らしめるの意氣を以て、奮戦されました。

この事變に依つて、初めて國民の惰眠は呼び醒され、心眼を開いて、祖國日本の現狀と、東洋亞細亞の有様、又世界人の腹の底までも、見抜くの明が開けたのでございます。

この事件以來、一般國民は、軍人を見る眼が一變致しました。

一種の頼もしさ懐しさ尊さを感じて、道に行かうても、軍服の人を見ると襟を正し自然に頭の下る様なものが、自然の感じとなつて現れて參りました。

一旦緩急あれば、君國と國民同胞の生命と財産とを守る爲には、己が命も捧げて盡

すといふ、尊い軍人に對して、その存在の輕重が、時世と民心の動搖に依りて動くといふ事は、有るべからざることでありますけれども、事實として、その時世に現れて來るのは、致し方のないことでございます。

誰言ふとなく、昭和の維新といふ、力強い聲が全國に漲つてゐる今は、當に君國を守る人々の、得意全身に現れてゐる時です。

思ひなしか、誰も彼も、營門から溢れ出て來る人々は、足が力強く地について、體は元氣に満ち、眼は清く輝いて、無意味に笑ふ聲の朗らかな中にも、勇氣が一杯に満ちて居ります。

これが軍國日本の秋と思へば、何となく頼もしく思へます。

營舎の友垣

東京全市の賑かさを他所に、戸山が原の松の老木の茂つた岡の上に、今しも腰を下した二人の軍人がありました。

何れも騎兵上等兵の肩章をつけて、男性としての剛健さ、軍人としての意氣の漲つた若者であります。

一人は秋月正、一人は園部祐次と言つて、同じ營舎に起居を共にする、特に意氣投合した親友同志でした。

二人は何の氣置きもないらしく、松の根方にごつかりと腰を下すと、秋月は牙えた聲ではつきりと言ひました。

「園部、君外へ遊びに行き度かつただらうな。」

「こんな所へ引張つて来て、氣の毒だつたね。」

「いゝや、何處でもかまはないよ。」

「僕は別に外へ遊びに行く當てなんかなかつたから……。」

矢張り君と二人で、静かな場所で、心の儘を浸々と話して見度いと思つてゐた所だ。

「さうか。それだと嬉しいんだが……。」

實は僕が、君を誘つて此處まで来たのは、外じやないが、お互に僕等は昨年、入營した日から、不思議に心が合つて、肉身の兄弟の様に親しく思つて、力になり合つて来たんだが、もう僅かの間だけで、別れなけりやならぬ。

それを思ふと、僕は何となく、君と別れるのが名残り惜しく思はれてね。」

「全くさうだよ。」

僕も君の言ふ通り、お互に兎も角無事で、過させて貰つて、二人共最初に固く誓つ

た通り、上等兵にも進級したし、お互に故郷へは、大手を振つて歸れる譯だが、二年間無二の友として交つて来た、君と別れるといふ事は、實際堪らなく淋しいんだ。

と言つた所で、どうする譯にも行かないから、結局は別れて歸るんだけれど、別れからでも、いつまでも今の様な心持で、一生何事にも力になり、相談し合つて、行かうといふ誓ひだけは、君に破つて貰ひ度くないと思つてゐるんだ。」

「實は僕もそれを君に誓つて貰はうと思つて、此處まで来たんだよ。」

それについて僕は、折入つて君に頼み度いことがあるんだが、園部、聞いて呉れんか。」

「聞くとも、君の言ふ事なら大抵の事は聞くよ。」

「だがしかし、どんな事か聞かして呉れなきや返事は出来んよ。」

「それはこれから話すんだ。」

真面目な話なんだぞ君。」

いゝかしつかりして聞けよ。」

「前置きはごうでもいゝから、矢張り打解けた氣持で話して呉れ。」

「所がごうも、かん／＼になる性質の話なんだから、困つて終ふんだよ。」

「一體秋月、今日に限つてごうしたんだ。」

「變だよ君。」

「變だらうさ。」

「僕もさう思ふよ。」

園部、突然こんな事聞いて變だが、君細君はあるかい。」

「冗談じやない。」

藪から棒に何を言ふんだい。」

「僕はまだ二十三だよ、そして二十二で入營して、二年もうちにゐない僕に、ごうして家内などがあるものか。」

「無い事は君知つてるじやないか。」

「うむ、知つてる、」

「だがお互に除隊する頃になると、故郷の方で除隊祝ひと、嫁取りと一緒にし度いといふ様な事を言つて、親達が焦つて嫁を捜すといふ事がよくあるから、君にもさうした事があるのじやないかと思つたからだよ。」

「あゝさうか。」

その事なら、君の言ふ通り、故郷でも一人子の僕の前途を、餘程両親が心配して、あちらこちらと捜し廻つて、あとから／＼と候補者を選んで、寫真など寄越して呉れたが、外の事ならごうでもかまはないが、一生苦樂を共にする家内を選ぶといふ事になると、枝葉をつけて賞め立てた、親の見立てや、心持を知る事の出来ぬ寫真ぢや、何とも方法が立たないから、僕は歸つてから二三年が／＼りでゆつくり、捜して貰ふから、焦らずにおいて呉れるやうに、いつも返事を出してゐるから、そのまゝになつて

終つて、今では何の話も交渉もないから、妻といふ様な事は無條件で、極めて呑氣な境涯なんだ。」

「さうか。」

それを聞いて僕は安心した。」

「僕に家内が決つてゐないといふ事が、どうして君に安心なんだ？」

「それは外ではないが、無遠慮に言ふが、君僕の妹を、貰つて呉れないだらうか。」
園部は今更の様に、驚きの眼を睜つて秋月を眺め、

「君に妹がある！」

おいそれは本當かい？」

ついぞそんな事聞いた事がないぞ。」

「それは話す様な機会もないし、必要もなかつたんだが、いよ／＼除隊も迫つたので本當の心持を君に打明けて、頼んで見るんだ。」

「尤も縁談といふ様な事は、どんな堅い義理人情の中でも、又親しい間柄でも、因縁がなければ纏まるもんぢやないし、君と僕がどんなによく信じ合つてゐる、親しい間柄であつても、それを理由として、妹を君に是非貰つて呉れといふ様な、さういふ考へぢやないんだけれど、其處が相縁奇縁といふ事があるから、萬一因縁があつて、君の所へ貰つて頂く事になれば、妹も仕合せするだらうと、大分前から僕は考へてゐたんだ。」

だが口へ出すのは今が初めてなんだけれど……。」

「さうか、君に妹さんがあつたのか。」

さうして年は幾つで、今は故郷にゐられるのか。」

「年は十九になつてゐる。」

「實は家にゐる事はゐるが、毎日或る會社で働いてゐるんだ、……。」
「會社で？」

「さうだ。」

何も彼もすつかり話さなければ分らないが、僕のうちは、昔は可なり村でも相當の物持であつたさうだが、父の代に少し色々な事業の頭株に擔がれて、つまらぬ事業に首を突込んで、澤山のお金を入れたが、その事業が失敗したため、澤山の借金をして一時は全財産を失ふ様な悲境に陥つたけれど、母の實家や、近所にある昔の大本家、親戚や知人達の處で助けて呉れたために、家屋敷や周囲の田地や畑一町餘りと、山林二三枚だけ残つてゐる。

これは僕がこれから働いて、その金を返すといふ證書を入れて、保留してあるんだ。だから父からは財産を譲つて貰つたのならいゝが、借財を譲つて貰つたんだ。全く變な次第さ。」

「そんな實例はよく世の中にあるね。」

「餘り有り難い遺産ぢやないが、子としての責任上、止むを得ないから、父が亡くな

つた時、僕は勇敢に、その借財を全部引受けて終つたんだ。」

「痛快だね。」

そしてそれは何時の事なんだ？」

「僕の十七の年の春だつたよ。」

それで僕は、父が死んでから間もなく、感ずる所があつて、中學を三年で退學して静岡の篤農家の牧村さんの所へ行つて、家僕となつて四ヶ年真劍で、土に親しんで林業と農業の事を、研究させて貰つたんだ。」

「その目的は何處にあつたんだ？」

「それは中學なんかへ行つて、形式的な理窟を覚えて見た所が、卒業してから何の役にも立つものぢやない。」

上の専門學校や大學へ進むといふ様な事は、學資がないばかりぢやなく、境遇上許されないし、社會に對する何の經驗もない僕が、俠氣を出して、父の借財を相續した

だけぢや、これからの生活の道が立つものぢやないし、そんな事で世間の物笑ひになつて祖先の名を汚し度くないし、それに最後の息を引取る迄、借金の事を非常に苦にして、僕にすまぬ〜とばかり繰返してゐた父の心持を思ふと、堪らなく氣の毒だから、父の負擔をすつかり僕が返済して終ふ事が、父の爲には、何よりの供養になるだらうと考へたのだ。

それには當り前の事をして、僅かな學問位で村の役場や銀行や、産業組合の書記や學校の代用教員を勤めてゐたんぢや、とても頭は上らないから、一つ思ひ切つて立派な農夫になつて、家を建て直さうと考へたのだ。

けれども今の様な農業のやり方では、到底行詰るばかりで、間違つてゐると、税金も出されなくなるから、思ひ切つて研究して、利益の澤山上る農業經營をやつて見度いと考へて、さうした方面の指導者を求めた所、僕の郡で青年團の講習があつた時、農業に關する實際指導のために、牧村氏が來られて、熱心に講演されて、非常な刺戟

を與へて行かれたので、この人の講演に魅せられて、

『この人が、實際家であるならば、この人をおいて外には、師と仰ぐ人はない。』と思つたので、早速視察に行つて見た所が、話で聞いたより想像したより、一層素晴らしい農場で、何とも言はれない立派な行届いた經營で、米なども數年前迄は段當り六俵位しか取れなかつたのが、今では十俵以上も收穫してゐるんだ。

畑なども、静岡は特に土地が肥えてはゐるが、兎も角經營の方法が變つてゐて、從來の一般普通の農家の様な、一作主義ではなく、同じ畑からでも、二作も三作も一絡に收穫出来る様、種々様々な物を、研究して作つてゐるし、理想的の果樹園もあるし、養雞牧畜等も、實に盛に經營されて、販路を廣く外國に迄も求めて、大規模に賣出してゐるといふ有様で、この牧村さんの力で、よく訓練されて全村近在迄も理想的農村經營の實を擧げ、全國の農民が不況に喘ぐ時も、この村だけは、年々收穫が増加して餘力が積つて、僅か十年位の間に、一千戸餘りの村だが、拾萬圓餘りもあつた借財を

返して、今では參拾五萬圓も貯金が出来てゐる。

村には立派な倉庫も出来、製産品を整理して賣出す作業場もあり、品質のよい産物を、ごん／＼と關東關西へ送り出してゐる。それがためこの村の學校なんかは、全く實際的に、生きた教育をしてゐて活氣がある。し、青年團處女會等も協力して活躍してゐるし、實際驚くばかり素晴らしい農村王國を現實に建設してゐるんだよ。」

「それは大したもんぢやないか。僕は全國に素晴らしい篤農家があるといふ事は聞いてゐるが、まだ静岡にさうした理想農村がある事は知らなかつた。」

「さうか。」

岐阜縣にも桑原彌吉氏と云つて、農林省の指定農園を持たれる有名な篤農家があつて土地の青年のみではなく、他地方人の爲にも熱心に指導に當つてゐられるさうだ。君も故郷へ歸つて百姓するならば、二三年行つて、みつしり農業經營法を習つて來給へ。屹度得る所が大いにあるよ。」

「うむ是非行つて見やう。」

さうした理想的な農業經營が出来るものなら、一村一郷を救ふことが出来るんだからなあ。」

「其處だよ。」

僕は丸四年汗みごろになつて、寢食を忘れて努力したそのお蔭で、牧村さんに可愛がられて、一家族の様に懇ろに世話を受けて、牧村さんの農場だけでなく、村の事までも世話をする中に、兎に角農業といふものゝ、實際の方法がすっかり分つて終つたので、いよいよこれからは我が家を中心にして、一郷の理想農場經營を始めやうと自覺して、故郷へ歸つたんだ。

この四年の間、僕の母は唯一人で、年若い妹を相手に、女の腕で朝も早くから夕

晩くまで、眞剣で働いてゐて呉れたんだ。しかし幾ら働いたつて女の腕で、一町の田畑の守りは出来るものではない。

田の方は一作取りだから、ごうにか始末をつけてゐたが、畑は家の周囲に野菜を育ててゐるだけで、外は殆ど桑を植ゑつけて、春も秋も時の相場でそれを人に賣つて、税金を出してゐた位のもので、心細い生活をしてゐたんだ。

僕が歸つた時は非常に喜んで、これから樂をさせ、妹もせめて技藝學校位には出して、二三年女の技を習はせてやらうと考へてゐた時に、検査を受けたら、多年の田園生活が作つて呉れたこの體格が、幸ひに甲種に合格して、入營する事に決つた時、僕は全く嬉しかつたが、母は年寄りだけに、涙をこぼしたよ。」

「それは尤もだ。」

杖柱と頼む君に、二年も入營されたら、全くお母さんにしちや淋しいよ。」

「いや、母は別に入營するといふ事を悲しんだ譯ぢやない。

却つて名譽ある軍人として、甲種に合格して、しかも

陛下のお膝元の近衛騎兵隊に入營するといふ事は、祖先へ對しても亦、世間へ對し

ても譽れだと喜んで呉れた。

だが一方女だから、先の事まで考へるのだ。

將來國家に戦争が起れば、第一線に立つて君國を守らなくちやならない。

若しさういふ場合に、戦地へ行つて、名譽の戦死をしたら、この秋月の家は絶えて終ふなんて言ふんだ。」

「それは尤もだ。老人にしてはすぐ

さういふ事も考へられるだらう。」

「それで僕は、若しそんな事になつても、妹がゐるんだから、相當の所へ縁づいて子供が出来たら、その子供を一人貰つて来て、この家を繼がせたら、決して祖先の血統は絶えない。」

と言つたら、母は、

「當てにもならない事だけど、體の丈夫な、性根のしつかりした人の所へでも貰はれ

て、須磨子が丈夫な孫でも生んで呉れたら、少しは力になるのだが……」

「言つてゐたから、僕は、」

「須磨子にだけは、屹度體も丈夫な、性質もしつかりとした、婿を選んで添はせるから、安心なさい。」

と言つたら、母は満足してゐた。

その時の若い妹の可愛い顔と、母の嬉しさうな顔が、まだ目にはつきり残つてゐるんだ。

そんな事でも言つて、年老いて行く母や、可憐な妹を力づけなけりや、自分の勇気が挫けて終ふよ。

かういふ事を言ふのも、半分は自分を激勵し、鞭撻する言葉なんだ。」

「それはさうだらう。」

君の心持はよく分るよ。」

と言つた園部の目は涙に光りました。

「それで僕は、折角四年間努力して得た腕前も、我が家の土には親しむ事も出来ず、そのまゝ入營して終つたのだ。」

その後で母は、少しリュウマチで悪くて、今迄の様に働く事が出来ないで、妹が二学期程行つた學校を止めて、家事やら農業の事やら、母の世話やら、一切の事をしてゐて呉れたが、何分にも税金も可なりかゝるし、入費は嵩むので、妹の手一つではとてもその負擔に堪へられないので、思案に餘つた結果、一里程離れた町に、可なり大きな紡績が出来たので、其處へ頼んで入れて貰つたさうだ。

そして朝も四時頃から起きて通勤して、晩は七時頃に歸るんだ。

それで漸く少しは纏つた金が月々取れるので、税金やうちの費用に困らず、晩は母の傍で看護して呉れてゐるんだ。

田の事は、村の親切な雇ひ爺さんを頼んで、やつてゐるので、その方の心配はない

が、畑の事は、妹が休みの日などに、朝暗いうちから起きて、星の出る迄働いて呉れるさうだ。

それで村ぢや孝行娘と言つて、みんなが賞めてゐて呉れるさうだが、それを聞く度に僕は、故郷の方に向つて、妹に手を合せて拜み度い位に思つてゐるよ。

「感心な人だね、君の妹さんは。」

「全く妹の事を自分で賞めては可笑しいが、心立てが優しい上に、性根が据わつてゐるので、小さい時から滅多な事に、弱音を吹いて甘へるさういふ様な事やいぢけたり拗ねたりして、母や僕を困らせた事もないし、頭だつてそんなに悪くなく、小學校一年から、高等科出るまで、首席で通したんだから、學資さえあれば、上の學校へ入つても、どうにか立派に卒業出来るだらうと思ふんだが、可愛さうに家の犠牲になつて娘盛りを日に焼けて、朝暗い中から夜暗くなる迄、働き續けて呉れる事を思ふと、僕は全く堪らないんだ。」

その妹の真心と努力に報いるために、あれの將來を、絶對的に祝福して呉れる配偶者を見つけて、嫁入らせ度いと、永い間考へてゐる中に、これならばと確信を得たのが即ち園部君、君なんだ。

今述べた様な事情で、何の取り得もない、家は貧乏で借金もあるし、妹はこれといふ教育もしてない、農村の娘に過ぎないが、心立ただけは、屹度君の將來を祝福するだけの力は持つてゐるといふ事を、兄として僕は確信してゐる。

だから事情が許されて、因縁があるものなら、君の家内に貰つて貰ひ度い。

若し君に承諾して貰へたら、この土の喜びはないんだ。」

しんみりと語る秋月の言葉を、園部はじつとうなだれて聞いてゐました。

夕映えの丘

五六

園部は永い沈黙を破つて

「秋月君、有りがたう。

よく言つて呉れた。

假令それは冗談であつても、君がそれ迄に信じてゐて呉れたと思へば嬉しい。

今の君の話を聞くと、妹さんは非常によく出来た人らしいから、僕はまだ見ぬ君の妹さんに、一種何とも言はれない懐しみを感じて、自然に敬愛の念の湧いて来るのを、禁じ得られぬ氣持がする。

無條件で君のその言葉を受けたい様な氣もするけれども、今此處で君と僕だけで、

そんな話をして見た所が、御本人の妹さんも、どんな考へを持つてゐられるか分らないし、お母さんの心持も聞かなければならぬだらう。

近い所なら兎も角、君の家と僕の家は、百里も離れてゐるのだから、交通の便利が開けて、一日に往復が出来るとは言つても、女としては大變遠くて淋しからうし又安心が出来なければ、來て呉れるといふ心持にはならぬだらうから、一應君のお母さんなり、妹さんにも相談して、心持を聞いて見て呉れた上での事にして貰へないか知らず。

「勿論さうども。

君の方だつて、君一人の考へで決めて終ふといふ様な事は、出来やしないんだから話は順序を追つて取極めて行くとしても、兎に角本人同志の氣持が、びつたりと合はなければ問題にならないから、先づ君の心持を聞いて見たんだが、君に縁があつて貰つて呉れてもいゝといふ心持があつたら、手紙なんかで聞合せて見るのも、はかばか

五七

しく行かないから、伴れ寄せて君に見て貰つてもいゝと思ふ。

若しその上で氣に入らなけりや、遠慮はないから、縁のなかつたものとして、水に流せばそれまでだから、一應妹に逢つて見て呉れないか。

念のために言つておくが、家の事情は今言つた様な、燈火將に滅せんといふ様な貧しい家庭だから仕度は全然出来ないがその代り、結婚で喧しく言ふ血統だけは正しいのだから、心配して呉れる必要はないと思ふが、念のために調べて呉れ、ば尙結構だ。それから妹の顔付だが、寫真ではしつかりした事は分らぬが、大體は分るから、一應見て貰はうと思つて持つて來た。

兄の僕から言つては可笑しいが、美人だと賞めて貰ふ程の値打はないが、人並より醜い様な事はないと思ふ。

田舎では相當目立つ方の顔立ちだ。

目方も十三貫二百あるといふから、可なり體格もしつかりしてゐる。

身丈は五尺二寸あると言つてゐたから、君と並べれば二寸低い、丁度似合の夫婦、……いや、そんなに極めて終ふのは僭越だつた。

あはは、……。

と愉快さうに笑ひ乍ら、手に持つてゐた風呂敷を解いて、寫真を取出して、園部の前へ差出すと、園部はいつもの快活にも似ず、幾分顔を赤らめ乍ら、その寫真を手に取つて眺め、「これは素晴らしい美人ぢやないか。」

と思はず口へ出しました。

「いや美人といふ程ぢやないが、實物はそれよりも少し人間らしい顔をしてゐるよ。それより心と體は、たしかに美人だといふ事を證明して憚らないよ、何時も心が朗かで病氣になつた事は殆無、そしてこれは今度妹から寄越した手紙だ。」

この字と文とを見て呉れたら、多少妹の心持と微力な力を知つて呉れる事の出来る参考になるだらうと思つて持つて來た。」

「ありがたう。」

二三日これを僕に貸して呉れないか。」

「二三日でなくとも、除隊するまで預けておいてもいゝよ。」

「ありがたう。」

では當分貸して呉れ給へ。」

僕は何だか將來に大きな仕合せを掴んだ様な氣持がして愉快なんだ。」

「ありがたう。」

僕の身勝手な申込を怒らないで、嘘にもさう言つて呉れれば嬉しいよ。

しかしこんな事を僕が君に頼んだといふ事は、無理にそんな事を言つて妹を強ひる譯ぢやない。

若し因縁があつて妹を娶つて呉れたら、妹がどんなにか仕合せをする事だらうし妹に依つて君も亦、屹度満足して呉れるだらうと思ふ。

そして僕も亦、今迄より一層深い因縁が結ばれて、親しく一生交際して行けるだけでなく、若し國家に戦争が起つて、共に戦死する様な事があつても君の血を受けた甥や姪が後に残つて、お國のために働いて呉れたら、どんなに痛快だらうなご有る事かない事か分らない、後の日の空想迄描いてゐたんだよ。」

「全くさうだ。」

君の言ふ通り、君とは永久に、親身の兄弟として交り度い。

因縁があつたら、僕は是非君の妹さんを貰ひ度いと思ふ。

兎に角逢はして呉れるなら、何時でも逢つて、妹さんの心持も聞き、自分の心持も聞いて貰ひ、家庭の事情も話した上で、諒解が得られたら、君迄お願いする事にしよう。」

「ありがたう。」

本當にありがたう。僕は何だかほつとしたよ。

この話を切り出す迄には、随分心配もし迷つたからね。」

「何故心配したんだ？」

「もう君には決つた人があるんぢやないかと思つて。」

「なにそんな事があるものか。」

矢張り因縁が、君の妹さんに繋つてゐたのかも知れない。」

「是非さうあつて欲しいと、僕も思ふんだがなあ。」

もう話はそれだけだ。

ではもうこれから町を一廻り愉快に廻つて歸らう。」

「うむさうしやう。」

と二人が立ち上つた頃は、太陽は西に傾いて、丘の松は夕映えに美しく輝いてゐます。

意外な面會者

その次の日曜の朝秋月が外出しやうと準備をしてゐると、營門の受付から、面會者があると呼びに來ました。

誰かと不審に思ひ乍ら、面會場へ行つて見ると、其處には懐しい妹が、微笑んで待つてゐました。

近づく兄を見ると、喜びの涙を瞳に滲ませ乍ら、立上りました。

「兄さん」

「須磨子」

と同時に呼び交されました。

「兄さん、御健康でございましたか。」

「あ、僕はお蔭でこの通りびん／＼してゐるよ。」

お前どうして手紙も寄越さず、突然やつて来たの？

何かうちで變つた事でも起つたのではないかい。

お母さんはお丈夫でゐらつしやるかい。」

「はい、この頃は太變よくなられました、お用達も御自分で出来る様になりましたし御飯も起きて召上るので大變喜んで居ります。」

「さうか。」

それは有難いね。

いつも心にはかけ乍ら、失禮ばかりしてゐてすまなかつた。

それでお前は、相變らず會社へ行つてゐるのか。」

「はい。兄さんがお歸りになる迄と思つて、まだ勤めて居ります。」

「そうかい、御苦勞だね。」

遠い道を通勤したりするのは、大抵ぢやないだらうに、夜はお母さんの世話やうちの事まで骨折らせて、休みの日は又外の仕事までして呉れるさうで、本當にすまないと思ふよ。

どんなに骨が折れるだらうと思つてね。」

「まあ兄さん。」

誰にそんな事をお聞きになりましたの？」

「誰つて事もないけれど、村の友達や誰彼から、知らせて呉れるので、僕はちやんご知つてゐるよ。」

「では兄さん。」

そんなくはしい事は千恵様からでもお知らせになつたのでせう。
ねえさうでせう。」

秋月は須磨子にさう言はれると、さつと顔を赤らめたが、さり氣ない顔で、

「千恵様なんか所からそんなに手紙は來ないよ。」

「うそ兄さん。」

私にだけは本當の事を聞かせて下さいませね。」

「何を言ふの？ お前は。」

何か誤解してやしないの？」

「いゝえ誤解なんかちつともしてやしませんの。」

私が急に參りましたのは、大變な事件が起つたものですから、兄さんに御相談に上つたんですの。」

「大變な事件つて、何なの？ 一體。」

うちの事か、それとも外の事？」

「うちの事ぢやありません。」

それりやうちにだつて、重大な關係のある事なんですけれど……。

一番問題の中心は兄さんなんですもの。」

「おい須磨子。」

お前何を言つてるの？」

みんなが笑つて見てゐるぢやないか。

屹度お前を、妹だとは思はないで、變に誤解してゐるんだよ。

お前が餘り變な事を言つて、俺を焦らすからいかんのだ。

はつきりした言葉で、さつぱりとした事を言へ。」

「だつて兄さん。」

私が他人でごうかした仲の様に見られて、兄さんの御迷惑になるんなら、私歸りませうか。」

「莫迦言へ。」

折角東京までやつて来て、用事も言はずに歸る奴があるか。

今日は日曜だから、僕も町へ出やうと思つてゐた所だから、一緒に行つて、何處かでゆつくり晝飯でも食べ乍ら、話を聞いてもいゝんだが……

そしてお前は、ゆつくり東京の町を見物したらどうだ。

丁度僕はお前に、手紙を出して、近い中に来て貰ひ度いと思つてゐた所だから、都合がいゝんだ。

「あら本當ですか。

それはごんな御用事ですか？」

「用事は素晴らしい用事なんだよ。」

「からかはないで兄さん、本當の事を仰有つて下さいな。」

「ではさつぱりと言つて上げよう。」

實は僕とお前は、天にも地にもかけがえのない二人丈の兄弟なんだから、僕は心か

らお前を力に思つてゐるんだよ。」

「兄さん、私だつてこれ位兄さんをお頼りしてゐるか分りません。」

「だからお互に力に思つてゐる兄妹が、ごちらも仕合せになつて、一生助け合つて行ける様な、最上の運命を拓き度いと思つて、始終お前のために考へてゐるんだ。」

「その事は私本當に感謝してゐますわ。」

でも最上の運命なんて、人の力で拓かれるものではありませんわ。

天命といふものがありますもの。」

「だが須磨子、

眞は天を動かすといふ事があるから、正しい力で開けば、可なり困難な境遇でも、人間の力で打開する事が出来て、愛の殿堂を築く事が出来ると、僕はいつも思つてゐる。」

「兄さんは何だか、難かしい事を仰有いますのね。」

でも私は従順な運命の子で、不満を感じないで、境遇に感謝して生きる方が、仕合せだと思つてゐます。」

「そのお前の真心が、運命打開の鍵なんだ。」

須磨子、お前十九になつたね。」

「兄さん、今更の様に何を仰有いますの？」

去年十八でしたもの、今年は十九ですわ。

來年は二十歳。」

「ませ返すなよ。」

冗談に言つてゐるんぢやない。確めてゐるんだよ。

十九と言へば娘盛りだから、もうそろそろ結婚する準備をしなければならぬよ。

須磨子、

お前誰かうちの方で、結婚し度いと思ふ、理想の人があるかい。」

須磨子は顔を眞赤にして、

「兄さん、厭ですわ。」

そんな冗談ばかり仰有つて……理想の人なんて、私そんな事、まだ考へて見た事もありませんわ。」

「さうかい。きつとだね。」

「え、何故又そんな事仰有いますの？」

「僕がお前に理想の人を見付けておいたからだよ。」

「まあ お兄さんでは……。」

「まあ眞面目で聞け。」

幸ひお前が來たので、二人を逢はせて見やうと思ふんだ。

だがお互に氣に入らなきやそれまでだ。

理窟や義理で結婚させようなんて言ふのぢやない。

先方もそれだけの理解は充分に持つてゐる、痛快な男だ。

若し成立すれば、お前の婿さんには勿體ない位の人物なんだよ。

一度逢つて見て呉れ、なあいゝだらう。」

「兄さん、眞面目でそんな事仰有つてゐるんですか。」

「眞面目だとも、兄さんにして見れば一生懸命なんだ。」

「では伺ひますけれど、兄さんがそんなに御信用なさる方つて、どんな方ですの？」

「それは僕と同年兵で、同じ室に寝起きして、二年間同じ釜の御飯を食べて、一本の煙草も二人で吸ふ程の親しい間柄で。」

腹の底の底までお互に理解し合つてゐる友達なんだよ。」

「さうですの。そんなお友達が兄さんにおありになつたのですか。」

それは何といふ方ですの？」

「名前か？ 名前は園部祐次といふんだがね。千葉縣人だよ。」

「あらさうですか。ではいつか兄さんが、大變氣心の分つた親友が出来て嬉しいと仰有つて手紙を下さつた時、送つて下さつたお寫眞に、兄さんとお二人で寫つてゐらつしやる方ですね。」

「あゝさうだ〜。」

寫眞を送つた事があつたね。

「さあ、さうだ、きりつとした威嚴の備つた男らしい、風采だらう。」

「あれだよ、あれが今度除隊すると、故郷へ歸つて農業をするんだが、両親もあり、

妹が二三人あるらしいが、極めて平和な家庭らしく、僕は去年の秋、一緒に遊びに行つて世話になつて來た事があるが、両親の人柄も妹達も非常に感じのいい、圓滿そのものゝ様な人達だ。

そして周囲も豊かな農村だし、うちも大した財産家ではないらしいが、うちなんか

の様の貧乏ぢやない。

あんな家こそ、お前の様な人が行けば、努力の仕甲斐があつて双方幸福な様に思つて見て来た。

唯遠いだけが、幾分かお母さんが問題にすればするんだが……

昔と違つて今は、百里位は一日で往復が出来るんだ。

ねえ さうぢやないか。

因縁なれば、住み馴れた家や親兄弟を残して、地球を半分離れた、晝の十二時と夜の十二時と合致する様な、ブラジルや南洋へ行く婦人さえ随分ある時代だ。

内地で百里や二百里離れて結婚する位何でもない事ぢやないか。

隣同志で結婚しても、極道のやくざ者と結婚したんぢや、人間として一生に一度も頭の上る時は来やしない。

百里や二百里離れたつて、一生伴れ添ふ夫と、深い愛さえあれば、女としてはそれ

程生甲斐のある生活はない。

徹底した夫婦愛の中にこそ、家庭の平和も幸福もあれば、よい子供も出来るんだ。

芳野先生が口癖の様に、村の青年團や處女會の者によくお話しになつて見えるぢやないか。

僕は全くそれに共鳴してゐるんだ。

是非お前を絶対的の幸福者にしてやらうと考へた揚句、園部の人格を見込んで、この前の日曜にその話をしたら、園部も眞面目で聞いて呉れて、まだ幸ひ配偶者も決つてゐないから、若し因縁があつたら、貰つてもいゝと言ふから、一度逢つて見て呉れど頼んだら、逢ふと言つてゐる。

そしてお前の寫真を見せたら、貸して呉れと言つて、持つてゐる。

そして寫真で見た印象は大變よく思つてゐるらしい。

それで一度逢つて、よく話し合つて見て貰ひ度いと思つてゐるのだ。

勿論お前の性質としては、早速に返事はしないだらうと思ふけれど、因縁があれば存外心持が進まないとも限らないから、今日來たのを幸ひに、一度逢つて見て呉れないか。」

須磨子はちつとつむいて考へてゐましたが、暫くすると、兄の眼を眞剣で見凝めて、

「兄さん。今仰有つた事、皆本當でせうね。」

「本當だとも、

誰が可愛い肉身の妹を、からかつたりするものか。」

「分つてゐますわ。兄さんの心持は。」

そんなに迄私の事を心配してゐて下さるかと思ふと、私勿體なくて泣けて來ますわ。

だけご餘り突然の事で、即座に御返事なんか出來ません。

それに少しも心に用意がありませんもの。」

「それでいゝぢやないか。」

用意なんて難かしい事を考へないで、無條件で逢つて見て、氣に入つたらその時には又、話をする事にすれば……。」

「だつて園部さんと言ふ方に對しても、何だか變な氣がしますもの。」

「いゝよ。向ふだつて無條件で逢つて呉れる事になつてゐるんだから。」

難かしい事思はないで、單純な氣持で逢つて見たらどうだ。」

須磨子は又ちつと考へてゐましたが、

「でも兄さん。私

一寸お目にかゝつた位では、お心持や御性格なんか分りませんから、さうした氣持でお目にかゝるのなら、二時間や三時間は、お話をして見なければ分らないと思ひます。」

「お前にそんな勇氣がありや、それこそ願つてもない幸ひだ。先方はどれ位それを望んでゐるか知れない。では今から行つて誘つて來やう。待つてゐる筈なんだから……。」

と出て行かうとするのを、須磨子は慌てゝ呼び止めて、「兄さん、一寸待つて下さい。」

と呼び止めました。

同胞愛

「いゝぢやないか、後で表へ出てからでも……。」

「いゝえいけませんわ。」

話がすつかり顛倒して終ひました。

私の出で参りました、大事の話を聞いて頂いてからでなくちや。」

「さうか。では落着いて聞かう。なんだつたの？」

「兄さん、人事ぢやない、重大な事がありますのよ。」

此處でお話していゝか知ら？」

「いゝさ、聞えたつて差支へのある様な事ぢやなからう。」

「それはさうですけれど……。」

ねえ兄さん。

千恵様と兄さんと、お約束がしてあるでせう？」

「お約束つて、どんな事を？」

「兄さんがお歸りになると、御結婚なさるといふ事。」

「莫迦な、そんな事はないよ。」

「かくしたつて駄目ですわ。兄さん。」

私千恵様に全部聞いてるんですもの。」

「千恵様が何と言つて話したの？」

「兄さんがお歸りになると、兄さんと結婚して頂くんですつて。」

「お前からかはれてるんだらう。」

そんな事はないよ。」

「ない事はありませんわ。」

兄さんは千恵様を愛してゐらつしやるし、千恵様は兄さんを真剣で思つてゐらつしやるんですもの。」

「お前から見れば、さう見えるかも知れない。」

けれどもそれについて彼是と辯解はしない。

しかしたとへば二人が、本當に深く愛し合つてゐるとしても、結婚をするといふ様な約束がしてあるといふのは嘘だよ。

そんな事があつたら大變だよ。」

「何故大變なんでせうか。」

「僕の方で貰ふとしても、神林の方で呉れる筈がないぢやないか。」

「だから兄さん、大變なんですの。」

今度神林では、千恵様に相談なしで、町の大塚さんへお嫁にやる様に決めるご仰有るのですもの。」

正の顔はさつと變りました。

「大塚へ？ あの金物屋のかい。」

「え、あすこの資産にすつかり伯父さんが乗氣になつて、千恵様がごんなに厭がつても、無理にやると仰有つて、親戚中掛つて、殆ど毎日無理勧めをしてゐらつしやる

ものですから、千恵様はすつかり悲観して終つて、兄さんの所へ來られないで、あんな所へ無理にやられるなら、死んで終ふと言つて、泣いてゐらつしやるのです。

お母さんにもその話をしましたら、お母さんも吃驚して、若しか間違ひでも起つてはいけないから、兄さんがごういふ事をが約束してゐるのかは分らないが、神林の伯父さんを怒らせて終つては、後々何につけても、兄さんがやり悪からうし、さうかと言つて千恵様の事も大事なんですから、と言つて心配しました結果、芳野先生に相談しました。

先生はそんな重大な問題は、こちらで彼是言つてゐるより、貴女が直接行つて、兄さんに相談して來る方がいゝと仰有つたので、私が參りましたんですの。

ですから兄さん、眞面目で考へて下さいませ。

須磨子にさう言はれると、正は

「千恵さんがごうしても厭だといふのを、大塚へやるといふんだね。

小父さんだけでなく、小母さんも、そんな事を思つてゐられるんだらうか？」

「小母さんなんかの存在は、てんで伯父さんが認めてゐませんもの。

小母さんが何と言つたつて駄目ですよ。

小母さんが昨日も、そんなに厭がるものを、やる必要はないんだが、小父さんが分らずやなので困つて終ふと言つて、近所の人に話してゐられたさうです。

「ではまだはつきりと決つた譯ではないんだね。」

「え、千恵様が、決めたら絶対にうちにゐないとか、死んで終ふとか言つて泣かれるものですから、若しそんな事になつては大變だと思つて、はつきり決めても終はず三日にあげず、親戚の人や村長さんや、校長先生を頼んで來て、承知させて貰ふ様に意見していただいたりなさるさうですけれど、千恵様が頭から絶対に厭だと言はれるものですから、みんなで持て餘してゐらつしやるこの事です。」

「芳野先生は、何と言つて見えるんだらう？」

「兄さん、先生はこの最後の解決は、兄さん一人の胸にあるのです。」

千恵様を救ふ者は、兄さんより外にはありません。

兄さんの信念一つで、すつかり解決がつくと仰有いました。」

秋月はちつと考へ込んでから、

「お前はごう思ふかい。この事を？」

「私の心持がごうであつたからとて、ごうにもならない事ですけれど、私の考へとして遠慮なく申しますならば、兄さんは一時はどんなに神林から憎まれても罵られても千恵様と結婚なさる事が、一番正しいと思ひます。」

「一寸待つて呉れ、須磨子、

何故正しいだらう。」

僕は本當にあの人と結婚するといふ約束はした事はないし、塵程も忌はしい行爲もした事もない。

唯純真なあの人を愛してゐるのと、お前と小さい時から、非常に仲のよい友達であつた關係上、僕は自分の實の妹と同じ様に思ふ、同胞愛を持つてゐるだけだ。

それに僕が牧村さんの農場へ行つてゐる四年間も、入營してゐる二年間も、始終僕のうちへ出入りして、お母さんを慰さめて呉れるといふ事を知つてゐるので、心から感謝し、その心持を敬愛してゐるんだ。

さうしたあらゆる方面から、あの方は立派な娘だと尊敬してゐるけれど、元々うちを見る影もなく落ぶれて、有る物は借金ばかりだし、神林は近郷切つての物持で、飛ぶ鳥も落す勢だから、こちらから丁寧に頭を下げたつて、向ふでは貧乏人の小僧と言つた様な顔で歩くといふ風で、僕と小父さんとは、思想に於て天地の差があるんだから、ごう考へたつて、圓滿に解決のつきさうな事はないよ。

その資産に於て性格に於て、全く正反對の立場にゐる僕が望んだとて、決して呉れる筈はないと思ふ。

そんな理想や空想を描いて、小父さんと醜い争ひをする必要はないし、僕は僕としての計畫通り、牧村さんの農園と、軍隊で鍛へたこの腕で、吃驚する程の、理想的模範農園を築いて見やうと、真剣で考へてゐるんだ。

今の僕には、理想農場の開設が、愛でもあり戀でもあるんだから、外の事で餘り心を痛め度くないんだ。」

「それなら兄さんは、千恵様の事は、どうなつてもかまはぬと仰有るのですか。」

「そんな譯ぢやない。」

けれども絶対に出來ない事を夢見て、千恵さんを迷はしてはいけなしいし、僕もその事のために、國家の干城として鍛へ上げたこの人格を、彼是非難されては残念だと思ふから……。」

「でも兄さん、

そんな事を言つてゐたら、誰に相談する人もなく、頼みに思ふ兄さんが、そんな事

言つてゐらつしやるのを千恵さんが知りなかつたら、どんなことをなさるか分りませぬ。

取返しのつかない事になつたら、手は下さなくても、兄さんが業も同様になります。

兄さん、そんな事になつてもかまひませんか。

本當に兄さんは、千恵様を愛してはゐらつしやらないのですか。」

「愛してゐたつて、どうしやうもないぢやないか。」

「どうしやうもない事なんかありません。」

「ではどうすればいゝんだ？」

「千恵様が若し兄さんの所へ逃げてゐらしたら、兄さんは御都合のいゝ、勝手な事ばかり仰有つて、義理や人情や、名譽や地位にこだはらないで、本當の眞心で、千恵様の眞心と體を保護して、庇つて上げて下さるのが、本當の道だと思ひます。」

兄さんにはそんな、義侠心に富んだ、男らしい勇氣はお有りにならないんでせうか。」

「お前には、そんなに僕が意氣地なしに見えるかい。」

「だつて仰有る事が曖昧で、取り所がありませんもの。」

「須磨子、お前にはさう見えるかい。」

だが幾ら義理人情や、名譽資産にこだはらない様にと、意地になつても、國家の干城として生きる、在郷軍人になれば、人の道に背いては、軍人の不名譽になるんだからなあ。

軍人は除隊して歸つても自分の體にして自分の體ではない。

一朝事ある時は、自己を忘れて、一命を君國に捧げて盡す、尊い義務があるんだよ。その名譽ある軍人が、人の娘を誘拐したと、人に言はれたくない。

こだはる譯ぢやないが、自分のうちの身分がお前の知つてゐる通りだから、假令千恵さんと僕との二人は、深い信愛で結ばれて、財産も地位も、眼目もないとしても、世間では千恵さんに付いた財産でも目宛てに、誘惑したのだと噂されても仕方がない。

それではこれまで苦勞して来た甲斐がない。

僕はそれが辛さに、入營してから、千恵さんから親切な手紙を呉れても、何とかしてそれを、忘れよう／＼として、苦心して戦つて来た。

しかし本當の心はそれと反對に、知らぬ間に近寄つて、別れてゐ乍ら觸れ合つて行く情愛をどうしやうもない苦しさを嘗め續けてゐるんだよ。」

「それでは兄さんも、眞剣で千恵様を思つてゐらつしやるのですね。」

「正直に言ふとそれが本當なんだ。」

「それなら兄さん。」

そんな誤解を受けるのがお辛かつたら、千恵様が何にもなしで、着のみ着のまゝで兄さんの懐に飛び込んでゐらしたら？………。」

「若しあの人にそんな勇氣があつたら、裸一貫着のみ着の儘の千恵さんなら、妻として、信愛する事が出来る。」

そしてごんな罵詈暴言も、實證を駁して眞心で勝つて、最後の勝利をするだけの覺悟はあるんだ。」

「兄さん分りました。」

私本當に安心致しました。これですつかり解決がつかますわ。

除隊なさるのも、もう間もなくの事ですもの。

私お母様と二人で、一生懸命で、兄さんのお歸りになる喜びの日を、準備して待つてゐますわ。

兄さんの今仰有つた事を、千恵さんに申上げてもいいでせう？」

「誘惑するんぢやない。」

僕は唯信念を言つただけだ。徒らに告げるにも及ばないだらう。」

「分つてゐますわ。私安心して歸られますわ」

「おい／＼、お前歸るんぢやないんだらう。」

前の話があるんだせ。」

「今日お目にかゝるんですか。」

「お前が僕の事を心配して呉れると丁度同じ位に、僕はお前の事を心配してゐるんだよ。」

「感謝しますわ。」

「そのお禮があとで言つて貰へるといゝんだがなあ。」

「ちやそのまゝ暫く其處で待つとれよ。」

と靴音を立て、營舎の方へ走つて行きました。

その後姿を、瞬きもせず、須磨子はちつと見送つてゐました。

國家の干城

九二

秋月が園部と須磨子を愛宕山の公園に残して、二三時間町を歩いて來ると言つて下りて行つた後、二人は沈黙したまゝ、その後姿を見送つてゐましたが、園部は「少しその邊を歩いて見ませうか。」と誘ひました。須磨子

「はい。」

と從順に答へて立上ると、少し間隔をおいて歩き出しました。人の餘り歩かない、静かな所へ來ると、

「少しかけて話させうか。」

と須磨子に進めて、園部は傍のベンチに掛けました。

須磨子も勧められるまゝにかけますと、園部は何のこたはりもなく、

「よくお出でになりましたね。」

全く僕は秋月君に、君の様な妹さんのある事は、ついこの間迄知りませんでした。」

「さやうでございますか。」

入營以來兄が、大變お世話になつて居りますさうで、よく手紙などで貴方の事を無二の親友が出來て、力強く愉快に過してゐると、知らせて呉れますので、蔭乍ら感謝申上げて居りました。」

「あゝさうですか。」

それはごうも恐縮です。

實は僕から、突然こんなお話を申上げるのは、失禮かも知れませんが、入營以來、秋月君とは、非常によく心も合つて、全く兄弟以上に交つてゐますので、何も彼も

九三

打明け合つて、常に水魚の交りを結んで居ります。

もう除隊も間近に迫つたので、何時か二人だけの世界で、思ふまゝ話し合はうぢやないかと約束してゐました所、先週明治節の日に、戸山ヶ原へ行かうと誘はれたので、二人切りで行つたのです。

その時秋月君から、家庭の事情に就ても、すつかり聞かせて貰ひました。

その時秋月君が言ふのに、故郷に唯一人の妹があるから、まだ婚約した方がないならやらうかと言ふ様な話が出ました。

初めは僕、冗談だと思つてゐましたが、段々伺つて見ると、非常に眞面目な話で、僕に對しては、親密な友愛から、又貴女に對しては兄妹愛から、純眞な氣持で考へてゐられるといふ事がよく分つたのです。

それに秋月君は、僕のうちは千葉ですから、一二回うちへ日曜に行つて貰つた事があるものですから、僕の家庭の事情や大體の事は分つて居られるので、非常に好感を

持つてゐて、呉れるらしいのです。

僕もその眞實の厚意を深く感謝しました。

けれども何分にも、貴女のお母さんのお考へといふ事も伺つて見なければ、分りません。僕の方としては別に、決つた婚約もありませんから、両親や親戚の者にもよく事情を話したら、喜んで賛成して呉れるだらうと思ひます。

が第一御本人の貴女のお心持が大切ですから、一度お目にかゝつて、總べてのお考へを聞いて見度いし、僕の考へも聞いて頂き度いのです。

そしてお互の考へがびつたり疎通する様な事なら、結構だが……と申しておいたのです。

その時貴女のお寫眞も見せて呉れましたから、お借りしておいたのですが、こんなに早くお目にかゝる機會があるだらうとは、思ひませんでした。

お目にかゝれるにしても、除隊の時兄さんを迎へにでも來られた時、機會があれば

と考へてゐたのですが、本當に意外でした。

今朝兄さんから話を聞きになりませんでしたか。

須磨子は、心持うつむき加減に、膝にきちんと手を置いたまゝ、

「兄から今朝一寸お話を伺ひましたけれども、餘りに突然で、私には何の用意もございませんので、今日お目にかゝる事はどうかと、兄にも申しましたけれど、そんな難かしい心持でなく、兄さんの親友に敬意を表するといふ、親しい心持で、お目にかゝつて見よと申しますものですから、お供して參つたのでございます。

兄は貴方に何と申し上げましたか分りませんが、私こんな年だけは一人前になつて居りますけれど、本當にまだ何も出来ないものでございますから、とても他所様のお宅へお世話になつて、使命を果せる様な力はございません。

ですからそんなお話を伺ひますと、心から赤面いたします。

「いや、決してそんな事はありません。

秋月君は何事も正しい方で、性格は竹を破つた様な人ですから、偽りはありません。僕も思ふ事は、すつかり言つて終はなければすまない性質ですから、本當の事を申しますが、秋月君は僕に貴女を紹介する時、貴女の性格そのまゝを、全部聞かせて呉れました。

そして身丈とか容貌といふ様な事も言つて居りましたが、お目にかゝつて見て、ちつとも飾りのない事を知つて、僕は愉快です。

それで僕は、自分の心持を、有りのまゝに申しますと、唯自分が、軍人であるといふ重い使命を持つ以上は、家内だつて唯普通の女性であればよいとは思ひません。我々お互軍人は、故郷へ歸つては、在郷軍人となつて、各々その職業に就いて、國家に何事もない時は、それで安らかに職業に従事して行く事が出来ませんが、萬一戦争でも始まると、總べてを捨て、戦線に向はなくてはなりません。そんな時に家庭が亂れてゐてはごうにも始末がつかみません。

父母は日増に老いて行くし、子供は澤山出来て来る、百姓も手廣くやつてゐるといふ時に、自分がゐなくなつたら、何も分らなくなつて、唯徒らに弱音を吐いて、人に凭れる様では、一家は立ち行きませんし、子供の教育も出来ませんから、碌な人間になる筈はありません。

さうなると自分だけは、充分な働きをして、義勇奉公の實を擧げる事は出来ても、反面に於ては、全く君國への御奉公が怠る事になります。

それでございますから、若し妻を娶るとすれば、それこそ名も名譽も地位も何にも要りません。

日本の女性であればいゝのですが、條件としては、體が勝れて丈夫な事、愛國的の信念が強くて、在郷軍人としての夫の義務責任に、充分な理解を以て、平常から父母に對する態度、子供の教育、家事、經濟、農業、交際等に、充分な實力を以て、鮮やかに處置して行けて、萬一自分が動員令を受けても、周章せず騒がず後を引受けて人

様の力に絶らずに、立派にやつて行けるだけの實力ある聰明な婦人が欲しいのです。

それですから、僕は現在の國狀から考へて、將來必ずもつと幾倍幾十倍の國難に遭遇して、我々軍人は一齊に立たなければならぬといふ、覺悟をしてゐますから後の家庭といふよりも、國家のために、妻は全く一心同體の實の擧げられる、協力の出来る婦人をご望んでゐます。

だから父母や親戚が、どれ程焦つて、候補者を選んで呉れても、必要のない條件に依つて、同意し兼ねるものですから、今迄何とも故郷の方へは、幾つかの話のあつたのにも、よい返事がしてないのです。

全く軍人としては、深くその點を考へさせられますからね。

秋月君もこの點は、極めて大事を取つてゐられる様です。」

須磨子はうなづいて、ほゝゑみ乍ら、

「本當に仰有る通り、兄も随分お嫁さんの事では、心配してゐるのでございます。

「どんなに氣心もよく分り合つて、申分のない間柄でも、矢張り義理とか人情とか、資産身分地位とか、いふものが、大きな感情となつて妨げますものですから、自分の思ふ通りにする事も出来ないものですから……。」

「秋月君もこの頃、随分心配してゐる様ですね。」

「何か貴方にお話致しましたでせうか。」

「はあ、大體の事は聞きました。」

「親友の間柄といふものは、何につけても、親兄弟より打明け易いものですからね。」

「さやうでございますわね。」

「兄も色々な事で心配してゐますから、氣の毒だと存じます。」

「いや、時と眞心が、一切を解決して呉れますから、それ程御心配なさるには及びませんよ。」

「貴女方の様な、純眞な味方があるのだから、尙更心強いですよ。」

「時に僕は自分の勝手な注文をしました。貴女御自身では、どんなお考へをお持ちなんですか。」

「私の考へと申し上げます程の、纏つた事はございませぬけれど、でも遠慮なく申し上げさせて頂きますと、私はこんな風に考へて居りますの。」

「將來お國には、今よりもつと幾百幾千倍かの、大きな國難が來るだらうといふ事は貴方と同じ心持でございます。」

「國難に當る者は、あなたが軍籍にあられる方ばかりだとは思ひません。」

一旦緩急あれば

「聰明そのもの、様なはつきりした須磨子の腫に見凝められると、我知らず強く胸を打

たれ乍ら、園部は次の言葉に興味を以て、耳を傾けました。

「私は常に考へて居ります。

外國の兵隊は、大抵雇ひ兵が多くて、志願して軍人になる事も出来るし、止め度くなれば辭職する事も出来るさうでございます。

けれども日本では、上御一人の御統制を受けて、國民皆兵の重大な任務がございませぬ。

それがために、身體検査に合格して、御入營になつて、正しい訓練をお受けになつた方は勿論、萬一戦争があつて軍人が足りなくなれば、抽籤や合格に洩れて軍隊へお入りにならなかつた人々をも召集されて、それに向く軍務に服務されて、お國のため盡された例は、滿洲事變にも、日清、日露の時にも澤山ございます。

それを思ひましても、軍籍にある軍人の方は申す迄もありませんが、一般の男子も一旦緩急ある場合は、家を捨て、國防の第一線に立たなければなりません。

尙それでも人手が足りなくなれば、婦人だからと言つて、家の中に縮んでゐるばかりではゐられません。

男子に代り、又は男子と協力して、敵を防ぎお國を守らなければなりません。

かうした點から考へて見ましても、昔の婦人の様に、何事も男委せて力仕事も出来ないが、農業も出来ないが、交際の事も分らない、本當に子供の教育も出来ないで唯御飯を炊いて、子供を生むだけで、立派な體格や魂に育て上げるといふ様な實力がなければ、その一家々は勿論の事、お國が全滅するより外はないと思ひます。

それでございますから、これからの女性には、身分とか財産地位など、そんなものゝ有無に拘らず、結婚するならば、いつでもその家の夫となる人と、同じ程度の實力、常識があつて、常に平等の力で助け合つて行く事が出来、女で分らない、女で出来ないといふ様な事がない様に、心掛けておいて、萬一の時にはすぐ主人と代つて、自分一人で二人分の責任を負うて、鮮かに家庭の經濟職業教育交際その他を、切廻して行け

だけの體格と實力を養ひ收めてからでないこと、昔の様に兩親から着物や箆筒や調度品などを、買って頂く事がお嫁入り仕度だと考へて、お人形の様なお嫁入りする事は本當に無責任だと思ひます。

ですから私共、これからの女性には、さうした家庭生活と、國家の將來といふ根本の問題から考へて徹底した實力と眞心を以て、意義ある結婚に進むのが、婦人の道だと考へて居ります。」

園部は身動きもせず、目を閉ぢて、須磨子の落着きのある、透き通つた様な美しい聲で諄々と説き進んで行く。國家の將來と、家庭の主婦についての意見を聞くと、今更の如く、美しい須磨子の顔形よりも、尙尊い美しい魂の姿をはつきりと、目の邊り見る事が出来たので、敬虔な心持になつて、

「よく分りました。」

本當に貴女の仰有る通りです。

君國を守るものは、唯に國家の干城と、自ら名乗を上げてゐる軍人だけぢやない、又總べての男子だけぢやない、婦人にも同じだけの責任のある事は、よく分りました。日本の總べての若い女性が、貴女の様な純眞な心持で、國家を見定め自分の進むべき道を考へて呉れましたら、どんなにか幸福な、力強い家庭が出来、國家の基礎はこれがため、いよく固くなつて行く事が出来るのです。

僕は本當に貴女によつて、どれ位教へられたか分りません。

深く感謝します。」

「まあそんなに改つた事を仰有つて頂くと、私お恥しくて、身の置場所もございません。」

唯今申しましたのは、それが正しい婦人の道だと、理想だけを申上げただけで自身にそんな力のある譯ではございませぬ。

ですからいつも、自分の努力の足りない事を、恥ぢてばかり居ります。」

「いや、そのお考へが尊いのです。」

理想があれば、必ず一歩々々でも、それに向つて進みますが、自己の將來とか、國家の事に就て、何の理想も念願もなければ、方針も何もあるものではありません。

全く何も彼も分らないまゝに、盲目滅法で、無智無能なるが故に、知らずくの間、に家庭の幸福を破壊したり、國家を弱くする様な、不忠不心得を繰返して、人をも惱ませ、自分も、惱んでゐる婦人が、世の中にどれ程あるか分りません。

全く過去の日本と、これからの日本の立場は、大變に違つて來ましたから、昔の間違つてゐた習慣なんかは、改めて終つて、家庭は朗らかな純眞な、幸福な家庭に作り變へて、國家をも今の様な有様ではなく、本當にうるほひのある、人情の満ちた、正しい人のみが眞面目で正しい仕事をして、お互に助け合ひ慰さめ合つて行ける様なうるはしい國家にならなくちやいけないと思ひます。

全く貴女の仰有る通りです。

これからの若いお互の青年處女は、その意氣で、本當に純眞な眼で、國家を見凝めて正しい力で建て直さなければなりません。

本當に今日は思ひがけない方にお目にかゝつて、腹藏なく御意見を聞かせて頂けて嬉しかつたです。」

「私もこんなに打解けて、お話を伺つたり、私の心持を聞いて頂く事が出來ましたのは本當に思ひがけない嬉しい事でございました。」

「本當にさうでした。」

何れ又後のお話は御因縁があつたらさいふ事にして、今日はお別れ致しませう。

そして唯親友の妹さんとして、又貴女は僕を、兄さんの最も親しい友人としてだけの心持で、握手して別れ度いのですが………」

「はあ。」

「御承知下さいますか。」

と園部は立上つて、須磨子の前に近寄ると、須磨子の右手を固く握つて、
 「國家のために、お互の前途を祝福致しませう。」
 須磨子も立上つて固く握り返して、

「貴方の御健康をお祈り致します。」

と言葉を返しましたが、顔は耳の邊りまでばつと紅潮して居りました。

故郷の花

秋月が目出度く除隊して、正月は懐しい故郷へ歸りました。

我が懐しの村に近づくにつれて、人に言はれない、大きな幸福が、手を擴げて自分を待つてゐる様な喜びと、その幸福を奪ひ去らうと伸べられてゐる權力の手が、自分

の方へ差伸べられて、惹きつけられて行く様な氣持とが交錯して、不安と喜びを交々に抱いて我が村へ入りました。

其處には青年團、小學校の生徒や先生や、處女會や村人達が、喜びを満面に湛へて出迎へてゐて呉れました。

秋月は顔一杯喜びを湛へて、誰彼の區別なく、擧手の禮を致しました。そして

「私の入營中は、色々ご心配を頂きました、有りがたうございました。」

お蔭様で軍務を終りました、除隊する事が出来たのは、皆様の御厚意に依る事と、深く感謝致します。

今日は又御多忙な中を、多數皆様のお出迎へを頂きまして、有りがたうございました。

何れ又詳しい御報告は、後日致しますが、簡単ながら、御挨拶申上します。」
 その挨拶がすむと、須田村長は、

「秋月君には、二ヶ年前、近衛騎兵隊へ、御入營になり、後には年老いたお母さんと年若い妹さんだけの、御心配な家庭であられるにも拘らず、軍人として重い任務を感ぜられて、勇気を鼓して入營せられ、以来軍規を守り御勉勵の結果騎兵上等兵としての榮譽を得られ、本日除隊されました事は、本村民の名譽として、深く感謝する次第であります。」

「今後もしよ／＼多年刻苦努力御訓練を受けられました、尊い固い御精神を以て、君國守護の重任に當られ在郷軍人としては本村民鞭撻のために御奮闘あらん事を、切に希望する次第であります。」

その挨拶が終つてから、

「國家の隆盛と秋月君の將來を祝福するため萬歳を三唱し度いと思ひます。」

僭越乍ら私が発聲致します。」

と一入元氣を出して

「天皇陛下萬歳 萬歳 萬歳」

「秋月君 萬歳 々々 々々」

「有りがたうございました。」

と秋月は謹嚴な態度でお禮を言つてから、初めて我に返つて邊りを見廻しました。

すぐ後には、喜びに耐へられない程の眼を輝かし、涙さえ浮べてゐる須磨子の姿を

見付けましたが、「若しや？」と期待してゐた人の、美しい姿は、何處にも目に止りま

せんでした。

一時は暗い雲が、自分の目の先に漲つて來ましたが、すぐに拂ひのけると、又新しい元氣を取り戻して、力強い足を踏みめめて、慈愛の母の待つ我が家へ歸つて行きま

心の誓ひ

一一二

兩側は峯又峯續きの山で、その山と山の間に美しい水が音を立て、流れてゐます。その清水に添つて、平らな所は、悉く田が開かれて、山に添つた所は一面に畑で、その邊り大小の農家が左右に散在してゐます。

まるで夢の様に美しい、豊かな農村です。

新築して間もない學校と、その前には役場と警察が軒を並べてゐます。

學校から半町も離れない、お宮の傍らの閑靜な丘の上に、小ぢんまりとした、こなな農村には珍らしい、瀟洒な住宅が建つてゐて、中坪には早咲の梅が薫つてゐます。庭に面した八疊の間に、炬燵を圍んで坐つてゐるのは、この村の學校に廿年も奉職

されて、三年前に亡くなられた、有名な教育家であつた、芳野晃先生の奥様で、なほ子夫人といふ賢夫人と、訪れて來た秋月正とです。

なほ子夫人は今ではこの村の補習學校の先生として、村内はもとより近村から慕つて集つて來る補習科の生徒達に、家事裁縫始め女の技を懇ろに教へ乍ら、常に新しい思想で、世の中の狀態を常に研究して、今後の國家のため、家庭のために、眞に役立つ婦人を造るために、自己を忘れて獻身努力を續けて居られます。

村人達は上下共舉つて、この夫人に信賴して、單なる先生といふよりも、教への母として尊敬してゐます。

先生はこの村の女子教育者として慕はれるのみでなく、直接關係のない、青年達からも慈母の如く尊敬されて、何事かあると、すぐに相談をされますので、懇篤にその採るべき道を教へられて、大方は從順にそれに從ふといふ、實に不思議な程、人の眞心を惹きつける力のある先生です。

一一三

村には過ぎた名物の一つだと、村人は勿論近郷の人々さえ噂してゐます。

一を聞けば十を知つて、顔色を見れば、心の底を見抜いて、一言を聞けば裏面を見透かすといふ、聰明な方でありませう。

正もこの先生にちつと、慈愛の目で見つめられると、何となく威すくめられる様な氣持になつて、うつむいて終ひました。

先生は微笑み乍ら

「昨年秋須磨子さんが、わざ／＼貴方に逢ひにゐらした時、貴方ははつきり御自分の決心を仰有つたさうやありませんか。

それで私も、貴方は本當に男らしい方だと思ひました。

それ程の決心が貴方にあるなら大丈夫だと信じて、千恵さんにもその事を話して、本當の愛と、信念の力があれば、必ず解決がつくのだからと言つて、兎に角今日迄お父さんの言ひ様もないお腹立ちに對しても、堪へ切れぬ苦しさも、一生の幸福のた

めに堪へ抜いて、貴方のお歸りになるまでお待ちなさいと、待たせておいたのです。

それに御本人の貴方が、今の様に頼りない態度では、千恵さんが、可愛さうです。

それは貴方が仰有る通り、貴方から先に誘惑したのでも結婚しやうと約束したのでもないにしても、千恵さんが進んで貴方の所へ貫つて頂き度いと、真劍で思ひつめてゐるのは、よく／＼の因縁ぢやありませんか。

誰にしたつて、何も戯れに戀をするものなんてあるものぢやありません。

まして内氣なおとなしい人ですもの、それ迄に腹を決めてゐるのには、何か本當に貴方に見所があるからです。

あれ位聰明な子ですもの、唯貴方の男らしさを好むとか、愛するとか言ふ様な、簡単な問題ぢやありません。

考へても御覽なさい。

お父さんが乘氣になつて、大得意で決めた大塚さんの所は、財産は百萬長者だと言

ふし、息子さんは高等商業出の秀才だし、兎に角大袈裟な構へですよ。

おとなしく親の言葉に従つておけば、立派に調度品も支度して貰へて、立派な花嫁としてお輿入れが出来て、若奥様として一生不自由といふ事は知らずに過せるのです。あすこ邊りのお嫁さんになら、行き度いと望む人ばかりではありませんか。

それをどうしても厭だと言つて、さう言つては失禮ですが、餘り家計がお樂でもない貴方の所へ貰つて欲しいと言つて、貴方の留守中始終、お母さんの所の子にして貰つて、一生孝行するんだと言つて本當の娘さんの、須磨子さんも及ばない程に、暇さえあれば行つて、世話をしてゐて呉れたんですよ。

その心持をよく思つて御覽なさい。

人の噂も見榮も捨てゝの、真劍な心持です。

それが貴方に分らないのでせうか。」

「先生それはよく分つてゐます。」

けれども僕はそれについて、色々考へてゐるのです。

千恵さんはあゝいふ、資産家に生れて、不自由といふ事の體驗がないから、貧乏といふものは、どんな苦しいかといふ事が分らないのではないでせうか。

それに私の家へ來度いといふのは、小さい三つ四つの時から、須磨子と仲よしで始終うちへ來られて、母も二人を同じ様に可愛がつて、珍らしい物のある時は分けて上げたり、御飯なども一緒に食べる事が度々でございました。

僕も亦二人を妹の様に思つて、遊びになごもいつも、二人をつれて行く様にしてゐました。

さうして須磨子とちつとも變らない、打融けた氣持でつき合つて來たのです。

それが大きくなつて、男女といふ性別から、遠慮勝にはなつても、昔の氣持が抜けないで、僕の所へ來れば、他人といふ感情がなくて、本當に水入らずで、平和に一生を送ることが出来るけれども、萬一心持の分らない、全然家風の變つた所へ行けば、

何につけても不安な様な、怖ろしい感じがして、恐怖心を起してゐるのぢやないかと
思ひます。

さういふ單純な氣持からだつたとすると、今僕が勇氣を出して、小父さんに對して
義理人情を缺き、村の人達からありもしない誤解を受けて、罵られたりして、その侮
辱を忍んで千惠さんに來て貰つても、小父さんからは、目の敵の様に憎まれ呪はれて、
どうせ千惠さんの出入りもさせて貰へないでせう。

まあそんな事は忍ぶとしても、永い間の生活に馴れない、骨の折れる農業などに、
自分から鋤を取つて土に親しむ程の勇氣は、千惠さんには出ないでせう。

よしその勇氣があつて、するにしたところで、本當の事は出來やしませんし、永く
續く筈はありません。

その中に貧乏の苦しみが、身に滲みて來ると、今夢みてゐる甘い想像は破れて終つ
て心に不平も出て來るでせう。

さうなると、親に背いて出て來た事を、後悔して泣いても、取返しのつくものでは
ありません。

そんな事になると僕は、一層男子としての面目を潰すことになります。

又僕が一生農村で、農業のみをしてゐられると決つたものなら、それでもよろしい
が一旦緩急ある場合は、僕等軍籍にある者は、眞先に銃を取つて戦地へ出動しなけれ
ばなりません。

そんな場合、その留守を預る家内は、唯優しいとか、眞心があるとかいふだけの事
に安心して、委せて行けるものではありません。

百姓の妻は妻らしく、夫と共に鋤鋤取つて田畑も耕すが、一家の經濟の事も全部男
と同じ位の實力を持つてゐて、夫が召集を受けた後は、立派に家を経営し、子供を教
育して、人に厄介をかけたたり、人に引け目を取らぬだけの實力ある婦人でなくちや、
協力一致して、夫婦生活をする事は出來ないと思ふのです。

ですから、千恵さんの心持は、非常に嬉しく感謝してゐます。

出来る事なら、結婚し度い氣持で一杯ですけれど、それを無理にすると、双方が必ず後に不幸になる様な氣持がして、決斷が出来ないのです。」

芳野先生は思はず嘆息して、

「さういふ風に貴方から聞くと、私も何とも言はれなくなりませう。

でもまさか貴方の所へ来て、農業を戯れにする様な氣持ちやなく、本當に眞面目に働くつもりで見えるに違ひないのです。」

「しかし、それは難かしいですよ。

今迄田畑へ出て、本氣で働いたといふ、體驗はないのですから……

體格だつて、須磨子などは違つて虚奢ですから……

あの人は矢張り商店俸給生活者かなんかの奥さんに適した人なんです。」

「しかし貴方は、男だから、大きく廣く考へ、將來の事も考慮して見えますけれど、

千恵さんは女ですから、そんなに先の先迄判斷するなんて言ふ力はありやしません。

それに餘り貴方を熱愛し過ぎて、外を見るときいふ様な餘裕がありません。

それだけに一層可哀さうです。

それに比べて悠然として、自分の將來とか、二人の幸不幸を考慮したり、環境に囚はれ過ぎてゐらつしやる貴方の態度が、憎らしい様に私迄感じます。

それが男と女との性格の違ふ所かも知れませぬけれど……。」

「しかし先生、

一時的の感情で事を行ふと、必ず失敗します。

前後の考へもなく、無我夢中で感情に走り純眞な戀愛に進むには、僕は餘りに世の中を知り過ぎて、苦勞が身に滲み過ぎてゐます。」

「ではどうしても貴方は、この話には氣が向かないから、千恵子さんを、拒絶しやうとなさるのですか。」

「拒絶するなんて、そんな事はありませんけれど、矢張り自分は兎も角、あの人の將來を不幸にし度くないと思へばこそ、一時は水臭いと思はれても、僕は無理な方法で、あの人の愛を受け入れない方がいゝと思ふのです。」
としんみり言つて、うなだれた正の様子をちつと眺めてゐた先生は、暫く言ひ様もない思ひに引き入れられて、沈黙して居られました。

縁は神の御心に

「何事も縁といふものは、人が勝手に組合せる事は出来ません。」

初めに生んで下さる時に、神様が定めておゝきになつた人同志が一緒になるのであれば、幸福になれるものではありません。

この世で人が勝手に作った、財産名譽地位、そんなものは何の用にも立たないのです。

要するに双方の魂と體の結合だと思ひますけれど、貴方達の魂は結びついても體質が結婚に適しないと、否定なさるのは、一應尤もな様に思ひますけれど、千恵さんだつて、御大家の娘だから、小さい時からそんなに働かせてないといふだけで、體は決して弱くはありません。

あの通り丈夫で、何不自由のない體格をしてゐらつしやるのですから、働きなれたら何だつて出来る様に思へるのだけれど、其處までやる力があるかないかといふ事が貴方には御心配なんでせう。」

「その通りであります。」

「ではかうなさいませんか。」

もう直きにお花の稽古に、此處へ千恵さんがゐらつしやる筈ですが、友達と一緒に

來ると都合が悪いから、清子を使ひにやつて、すぐ來て貰ひますから、私が此處で本當の氣持を聞いて見ますから、貴方は奥の私の部屋に居て、どんな返事をなさるか、その返事次第で決心なすつたら如何でせう。」

「でもそんな厚顔ましい事は、變ちやありませんまいか。」

「變な事があるものですか。」

一生の重大問題ですもの、それ位の度胸がなければ、私の所へわざわざ相談に來て下さつた甲斐がないではありませんか。」

「それは母や妹が餘り、先生の所へ行つて伺つて來いといふものですから……。」

「だから私が責任を以て解決して上げようと思ふのです。」

有る縁なら結ばれる様、ない縁ならさつぱり打切つて終つた方がよいと思ひますから……。」

「では先生にお委せ致しますから、よろしくお願ひ致します。」

「それでは炬燵を奥に拵へて上げますから、私の部屋でよく、様子を聞いてゐて下さい。」

早速座敷を片つけて、正が奥へ引込むと、娘の清子を使ひに出しました。

間もなく今迄泣いてゐたのか、眼瞼を腫らして、千恵子が平常着の儘で、お稽古のお花も持たずに、清子について入つて參りました。

女の力

「先生、只今は清子さんにお使ひに來て頂きまして、有りがたうございました。」

「いゝえ、お使ひを出したりして悪かつたかも知りませんが、貴女に折入つて、お話しして見度い事が出來たので、お友達と一緒に都合が悪いと思つて、清子を使ひに出

しました。

お宅の方では御都合悪くはありませんでしたか。

「はい、都合の悪いことはございませんけれど、又父が例の話を持出して、朝早くから大きな聲を出して叱るものですから、泣いてゐたのでございます。

そこへ清子さんが呼びに来て下さいましたので、幸ひだと思つて、母が止めるのも聞かず平常着のまゝで、飛んで参りました。」

「さうですか。

又例の大塚さんの方の問題で？」

「はいさやうでございます。

今朝は夜明けから、怒り出しまして、今日の中に向ふへ返事をして、明日は日が良いから、結納の取交せをするんだと言つて、勝手に決めて終つて、私が承知をしないに拘らず、向ふへ返事をするから、それで悪いと思へば、勝手に何處へなりと

出て行くなり、死んで終ふなりせよ。と非道いことを言つて罵るのでございます。

私も今日といふ今日は親乍ら餘りに慘酷な心持に呆れて終つて、うちになんか一時もゐたくないと思ひました。

今なら何の造作もなく、死ぬ事も出来る様に思ひます。」

と我を忘れて啜り泣き乍ら、疊の上に俯伏して終ひました。

憐れみ深い眼で、先生は千恵子を見乍ら、

「冗談にもそんな縁起の悪いことを言ふものぢやありません。

大方そんな事だらうと、蟲が知らせたので、私が迎ひに出したのです。

何遍も聞かされてはゐますが、貴女はどうしても大塚さんへ行く事は厭だと仰有るんですね。

あそこへ行けば、一生お金にも着物にも不自由なく、奥様々々と皆から敬はれて、日髪化粧で遊んでゐられて、お父様やお母様や、親戚の方からも重寶がられて、一

生不自由といふ様な事は知らずに過す事の出来る境涯になれるのですが、それでも厭だど仰有るのですか。

と念を押した言葉が、餘程耳に觸つたか、千恵子は頭を上げて、

「先生、先生がいつも仰有いました様に、外形上の條件がごんなに申分なく調つてゐましたとて、それで幸福は得られないといふ事は、先生から聞かして頂かない前からよく分つて居ります。

人間の生活、殊に女の一生は、心から信頼し合ふ事の出来る、愛の力に依る生活でなければ、求める事は出来ません。

何遍も戯れに結婚の出来るものでない以上、私は父の犠牲になつて、一生を葬る事は出来ません。

それが最後まで、父に孝行になるものではありません。

私の耐へくた忍耐が破裂した時、必ず父は後悔するに決つてゐます。

その時になつてから、もとの純潔さを取戻すことは出来ませんもの。

私はごんなに父から責められて、假令殺されても、大塚さんへは行きません。」

「それ程の決心なら、それもいゝとして、大塚さんの方を斷つて、その反對に貴女はお父様が眞向から反對してゐらつしやる、正さんの所へ行き度いと、お父さんに仰有つたさうですね。

それがために餘計にお父さんは、躍氣になつて怒つてゐらつしやるといふぢやありませんか。

何故そんな事を仰有つたのですか。」

「でも餘り父が金だとか、地位だとか、名譽だとか、形式な事ばかり言つて、一生の幸福を取逃す様な事を繰返すものですから、私思はずそんな形式的の事なんかちつとも幸福にはなりません。

貧しくとも、心から信頼の出来る、頼もしい人の所でなくちや厭だど申しました。

すると父は、そんな人は何處にあるかと、詰問しましたので、私を本當に仕合せになる事を願つて下さるなら、正さんの所へやつて下さい。

と言つて終ひました。

「まあ、それは何時の事ですか、それは？」

「昨夜でございますわ。」

「それなら何と仰有いましたか。」

「それなら私が、正さんと事情でもある様に、すつかり誤解して終つて、母の監督が悪からだと言つて、母と私をとてもひどい事を致しますの。」

「まあ、何て亂暴な……」

それでお母様は何と仰有いましたか？」

「母は唯口惜し涙に暮れて、千恵子、死んで終つてお呉れつて、泣いて怒つて居りますの。」

「まあお二人共何といふ事を仰有るのでせう。」

お母様には、貴女の心持がお分りにならぬのでせうか。」

「一生父に虐げられて、真心が麻痺して終つた母ですから、純真な心持なんか、理解出来ないのかも分りません。」

「それで結局どうなりましたの？」

「父は私や母を散々苦しめておいて、今度は正さんが誘惑して、私に傷をつけ、この結婚に邪魔をするんだから、行つて談判をして來ると言つて、止めるのも聞かす出て行きましたけれど、幸ひ正さんはおうちにゐらつしやいませんでしたさうですの、小母さんや須磨子さんに、散々厭味を言つて困らせておいて、歸つて來てそのまゝ寐て終ひました。」

今朝は又早くから怒り出して、とても怒鳴つて居りますの。」

「そんなでしたのに、よく此處へ來られましたね。」

「私が一寸お勝手へ出た所へ、丁度清ちゃんが出来て下さいましたので、そのまゝ来て
終ひましたの。」

「それは大變ですよ。」

又屹度怒つて連れに見えますよ。」

「怒つたつてかまひません。」

この上無理を言つて、怒つたりしましたら、もう絶対にうちへなんか歸りません。
死んだつてうちへ歸つては參りません。」

「だけどお父様が、そんな事を言つて、正さんの所まで怒らして終つたんぢや、纏ま
るものも纏まらなくなつて、壊して終ふぢやありませんか。」

「どうしてそんな亂暴な事を仰つたのですか。」

「でも私決心してゐますもの。」

「決心つてごんな決心？」

「父が追ひ出して、うちにおかないと言つたら、私正さんの所へ行くんです。」

その事は私小母さんにも頼んであるし、須磨子さんにもお願ひしてあるんです。」

「でもそんな事をすれば、お父様や村の人や世間へ、正さんが怖ろしい悪者になつて
顔が向けられないからと言つて、斷られたらどうしますか。」

「先生、正さんはそんな薄情な方とは違ひます。」

小さい時から本當の妹の様に、可愛がつて下さつて、よく心持が分つてゐますけ
れども、とても情深い、親切な方ですの。」

そして千恵さんと一緒になれたら、本當に仕合せなんだけれど、と、二度も三度も
冗談でなく、仰つた事があるのですもの。」

屹度喜んで私を置いて下さると思ひますわ。」

「それは貴女の仰有る通り、心から愛してゐらして、心から貴女と結婚し度く思つて
ゐらしても、今の様な事情ではどうにもならないから………」

と言つて、義理や人情に堰かれて、拒絶されなにも限りませんよ。」

「若しそんな事を正さんが仰有つたら、私はその時こそ覺悟があります。」

「覺悟つて、どうしますか？」

「自分で立派に生命を絶つて、父や正さんに冷たい私の亡骸をお見せしますわ。」

芳野先生は思はず顔を上げて、

「貴女本當に、そんな決心をしてゐるのですか。」

それでは貴女に伺ひますが、貴女は御大家に生れて、碌に田や畑へ出て働いた事もないのに、正さんの所は、お父さんから譲り渡された大きな借財がある上に、財産としてあの家と、屋敷と周囲の田畑が少しあるだけです。

同じ仲よしの友達と言つても、須磨子さんは、家が貧しいために、朝暗い中から夜遅くまで、汗みごろになつて、どれ位働いてゐられるか分りません。

その須磨子さんだつて、いつまでもうちにはゐられないから、何れは結婚するでせ

う。

お母さんはあゝしてお年寄りですから、年々手が餘計かゝつて行くばかりです。

働き手と言へば正さん一人です。

その正さんがこれから働いて、家を興し、お父さんの残された莫大な借金を返さうとするのには、人並の働きでは駄目です。

それがために、折角行きかけた中學も止めて、静岡の農場へ行つて四年も働いて、歸ると又二年も軍隊へ行つて來られたので、これからといふ所です。

貴女のためにお父さんや親戚から罵られ、村人から嘲けられる事は、あんな意志の強い人だから忍び抜いて呉れるとしても、肝腎の貴女が、農業の経験がなくて、鎌も鍬も使へない様ぢや、どうにもなるものぢやありません。

夫婦生活といふものは、真心だけぢや圓滿にやつて行けません。

働く力も同じ様に持つてゐて、いつもよりよい半身として、助け合つて行かなけれ

ばなりません。

殊にあの人は軍人ですから、戦争でも始まれば、すぐに家を家内に委せておいて、出征しなければなりません。

そんな時に、あそをしつかりとして引受けて、總べてを處置したり、子供の教育も立派にして行けるだけの實力がなくちや、始終萬一の時の心配ばかり正さんがしてゐなければなりません。

さういふ事もよく考へて、自分の立場ばかりを都合よく考へないで、正さんの方の事情もよく考へて上げなければいけませんよ。」

「先生、そんな事はちつとも心配ないと思ひます。

今迄はお百姓にも、両親が出さないからしませんでしたけれども、百姓は一番好きですもの、正さんの所へ行けば、本當のお百姓になつて、あの方と一緒に、どんなに朝早くから夜遅くまで、もお百姓をします。

芝居で見る、鹽原多助のお嫁さんでも、結婚の當夜振袖を切つて、多助と一緒に河岸に着いた炭を、倉庫へ運ぶではございませんか。

本當に信頼出来る人と一緒に苦しい仕事だつて愉快です。

外の仕事は皆人を相手にしなければなりませんけれども、お百姓は土に親しむ自然の生業で、神様のお仕事をお手傳ひする、一番尊い仕事ですもの、私本當に農業に心からあこがれてゐます。

それに正さんは、お父さんから澤山借金を受繼がれて、家があんなに貧乏になつても、ちつとも怯まず、自分の力で家も興し、お父様の負債も返済すると言つて、非常な元氣でゐらつしやいます。

それにお母さんにも孝行だし、須磨子さんに對しても、本當に羨しい位御親切なお兄様ですもの、あんな方はどんなに搜したつて、絶対に又とはない方だと思ひます。それに牧村さんの農場へ行つて、四年間も眞剣で經營法を習つてゐらつしやいます。

たから、屹度素晴らしい腕前を持つてゐらつしやるぞ信じます。

軍隊の二ヶ年の義務を終つてお歸りになつて、理想農業に手をつけやうと、非常に勇氣を以て臨んでゐらつしやるのですもの。

あの方の腕前と、本當の眞心を知つてゐる私は、あの方の無二の片腕となつてお助けしなかつたら、誰がして呉れるでせう。

一緒に働く中には、女だつて一通りの事は覚えられないことはございません。

若し結婚した後、戦争が始つて出征される様な事があつても、立派にあとを引受ける事も、立派に子供を教育するといふ事も、自信を持つて居ります。

私はあすこへ貫つて頂いて、事業を助けるために、生れて来た様な心持さえしてゐるのですもの、正さんさえ私の心持を理解して下さつたら、私はどんな艱難も忍びます。

今こそ父が物質慾に迷つて、自分の子を本當に幸福にする道も、見失つてゐます。

れど、私さえおつと辛抱して、正しい神様のお心に叶ふ道さえ進んでゐたならば、總べては屹度時が解決して呉れて、お父様自身から、手を伸べて悪かつたと言つて、来て下さる時が来る事を固く信じてゐますから、それ迄は實家へ出入り出来なくとも正さんの強い胸にいつかり絶つて、力強く生きて行かれる事と思ひます。

正さんは、私が唯あの方の表面だけを見たり、そして小さい時から、可愛がつて貫つてゐるので、さうした愛情に引かされて、單純な氣持から、他家へ行く事を怖れる餘りに、あの平和な家庭の中に入つて、あの人の汗を蝕むつもりだらうと言ふ様に誤解してゐらつしやるために、はつきり態度を決めて下さらないのかも知れませんが、れども、私にはそんな弱い女ではございません。

親から澤山の財産を譲られても、身を持ち崩して、可愛い妻子や親を泣かせ、自分の身を滅ぼす様な人もあります。

けれども親から澤山借財を譲られて、それを返して、この世知辛い世の中に、滅び

かけた家を興さうといふのは、並大抵の事ではやり遂げられるものではございません。けれども堅忍不拔な信念を以てすれば、山をも抜く程の力があるのですから、正さんの様な信念の方を、お助けして働いたら、一生ごんなに意義ある幸福な生活が送れるか分りません。

私はあの方の現在の境遇と、将来の理想と人格をお慕ひしてゐるのでございます。この氣持が若し分つて頂けないで、現在の小さな事情にこだはつて、私を拒まうとなさるならば、あの方の前で死んでゝも、私の決心を見て頂く考へで居ります。

須磨子さんにもその事を誓つてございます。弱い様でも決心すると、水の流れる様に淀みなく、真心の中から、自分の心持を淀みなく告白して終つた千恵子は、今迄負つてゐた重荷を下した様な感じがして、ほつと致しました。

同時に芳野先生も異様な眼を輝かして、

「貴女の心持は、本當によく分りました。」

貴女は本當に強い方でした。本當に私は、貴女のその心持を、尊敬致しますよ。」

「正さん、お聞きになつた？」

といふ先生の言葉に、千恵子は思はず、

「えゝつ？ 先生 何ですつて？」

と驚く間もなく、間の襖が明いて、正の姿がさつと現れました。

義理に堰かれて

ごかりと正は其處へ坐ると、何とも言はれない表情をして、千恵子を見凝めました。
「千恵子さんの本當に僕は貴女にお詫びします。」

芳野先生は膝を進めて、

「千恵さんの心持を、全部お聞きになりましたでせう。」

「はあ、全部聞きました。」

僕は本當の日本男子に生き返りました。

本當に千恵子さんの仰有る通り、僕の表面だけを見て、須磨子に對する様な愛情に親しんで、僕に親しみ母に懐いてゐるために、安らかな心の生活を求めやうとの、夢の様なあこがれを持つて居られて、これから無限に來る苦惱といふものを知らない、本當のお嬢さんだと思つてゐたのが誤りでした。

何時の間にそれだけ精神が鍊磨されたのか、實に健全な信念を以て、將來を見凝めてゐられるのに敬服しました。

御両親や親戚、世の人達の心ない罵りを怖れ、一時の義理人情に堰かれて、貴女を拒んで、心にもない物質地獄にお勧めしたのは、僕が過つてゐたのです。

今のお話を聞いて、貴女の決心が分つた以上、僕はどんな責も一身に受けて、萬難と闘つて貴女を守ります。

そして貴女と結婚する事を、はつきりどこで誓ひます。

先生、貴女證人になつて下さい。」

「喜んでならせて頂きますよ。」

そしてお二人が本當の心持が分り合つて誓つて頂いたら、本當に私安心が出來ます。

私の様なもので、解決がつけ得られるか否か分りませんが、出來るだけ骨折らせて頂きます。

千恵さん、貴女もお喜びなさいませ。

正さんが今の様に誓つて見えるのですから………」

千恵子は餘りの嬉しさに、何とも言はれない昂奮にかられて、芳野先生が前にゐら

れなかつたら、正の膝に縋つて思ひ切り泣いたでせう。
が人目を憚つて、うなづいたまゝ、うつむいて終ひました。
丁度その時表に、荒々しい足音が聞えました。

生みの父

「あら、千恵さん。お父様です。
ごんな事を仰有るか知れないが、貴女達は奥へ、早くく。」
と二人を奥へかくして、芳野先生が、火鉢を拭いてゐますと、言葉も荒々しく、
「今日はく御免下さい。」
芳野先生は落着いた聲で、

「はい」

と答へる間もなく、早や玄關から上つて來ました。

「あら誰方かと思ひましたら、神林さんでゐらつしやいますか。

ようこそ。取り散らしてゐますが、さあどうぞこちらへ。」

と座布團を直すと千恵子の父は、横柄にその上に座つて、その邊りをじろく眺め乍ら、お茶を淹れてゐる芳野先生に、

「時に先生、今朝うちの千恵はお邪魔に上りませんでしたでせうか。」

「はい まだお出でになりません。」

今日はお花のお稽古にお出でになる筈ですから、お待ちしてゐるのですが、まだお出でになりません。

もうお宅をお出ましになつたのでせうか。」

「いやお花に來る事になつてゐたか、どうかは知りませんが、つい一時間ばかり前に

うちを出て終つて、何處にもゐないのです。」

芳野先生は何喰はぬ顔で、

「うちを無断で飛出される様な御事情がお有りになつたのでございますか。」

「いゝえ 別に。何に其

例の結婚の事で、少し手厳しく叱つたものですから、うちに居辛くなつて、飛出したのかも知れません。」

しかし死ぬ様な事はないでせうね。」

ど不安さうな面持で、それとなしに川の方を眺めやるのでした。

「まあそんな様な心持になる程の、お小言を仰有つたのでございますか。」

「今時の娘は、學校へ少し餘計に行つたり、新聞や雑誌を少し讀ませると、親の言ふ事を聞かので、手におへなくて困るのですよ。」

それに先生に當てつけて、こんな事を言ふのは、少し失禮ですが、若い者には受け

はい、が、先生の教育して頂くやり方が、ごうも親の言ふ事を聞かないで、我儘者になる様に獎勵して頂く様な感じがして、實は困つてゐるんですよ。」

「あら、私の責任だと仰有るのですか。」

と呆れた様に芳野先生は、急須を下においてお茶を淹れる手を止め、居住ひを直して千恵子の父の神林桂造の顔を見凝めました。

教への母

神林はその視線を避ける様にして、

「さういふ譯でもないんですが、二言目には、先生があゝ仰有つたとか、先生がかう仰有つたとか言つて、先生の事となると、一から十迄眞剣になつて聞く千恵子が、肉

身の親が、一生幸福にしてやらうと思つて、決めかけた結婚をどうしても厭だと言つて、承知しないのです。

その上あの正の所へやつて呉れど昨夜は破れ口をき、出して、親を手古摺らせて終ひました。

まさかそんな事は、本氣ぢやなからうと思つて、段々周囲の者に聞いて見たんですが、ひよつとすると、そんな考へを持つてゐるのが本當かも知れないし、正どそんなつまらぬ約束をしてゐるのぢやないかと言ふ者もあるので、呆れ果てました。

昨夜も正の所へ行つて、よく詰問して見やうと思ひましたが、青年會へ出てゐないといふし、今朝もゐないといふので、何處へ行つたか行先は分りません。

まさか正が、千恵を伴れ出したやうな事は、ないだらうと思ふのですけれど、どうでせうか先生？」

芳野先生は可笑しさを堪へ乍ら

「そんな事はないでせうと思ひますが………」

「まさかそんな莫迦な事はないだらうと思ふですが、萬一そんな事をして、誘惑なにかしたら、捕へて誘拐罪として、警察へつき出してやらなくちや承知しない。」

と一人で肩を怒らせて力んで居ります。

先生は出来るだけ落着いて、

「えらいまあ御心配でございます。」

しかしそれだけ御本人がお進みにならないものなら、大塚さんの方へ、どうしても上げにならないければならない事はない様に思ひますが、如何なものでございませうか。」

「貴方は知らないからですよ。」

「知らないど仰有いますぞ？」

「この村ぢや私のうちなんか物持の様に言はれてゐますが、高が知れてゐます、金

に見積つて貳拾萬か參拾萬有無ですが、大塚さんの所は、得米や家作から上るだけでも一年に壹萬圓以上で、商賣などは全國に向つて、手廣く取引きして見えるので、財産を見積つて見れば、まあざつと、貳百萬以上だらうといふ事です。

うちなんかと比較になりません。

それに息子は昨年高等商業卒業した秀才だし、親戚もお歴々ばかりですから、あそこ邊りと縁組しておけば、親として肩身が廣いし、何彼といふ時には、大變力になります。

又千恵だつて、あそこへ貰つて頂けば、重い物さえ持つ事はいらすに、主人の機嫌さえ取つてゐれば、日髪化粧で遊んでゐたつて、誰も叱言を言ふものなんかありません。

別荘だつて三つも四つもあるのですから、何處へ住まうたつて心の儘だし全く玉の輿ですよ。

願つても行けるものぢやないのに、向ふから望まれたんだから、あれの一生の幸福のために、少々は骨が折れても、一生懸命支度も氣張つてやらうと、親らしい心配もしてゐるんです。

その氣持も分らずに、頭から厭だくの一點張りで、耳も傾けません。

外の事とは違つて、縁談だけは、本人の厭だといふのを、無理に決めた、所で行かなければ困つて終ふし、又無理にやつたにしても、飛び出されては一層困るので、去年の秋から、人を代へては、何遍といふ事なしに、言ひ聞かせて貰つたけれど、とんと行くと言はないのです。

向ふでも餘り返事が長いので、待ち切れず、話が決つたら、明後日が吉日だから結納を納め度いから、今日の中に返事をして欲しいと、昨日仲人が來たのです、もう退引ならぬので、少し手ひどく意見しましたら、千恵は生意氣に、金や地位なんかちつとも欲しくない。

本當に子供を可愛いと思ふなら、一生幸福に生きて行ける所へやつて呉れと言ふも
のですから、

そんな所が何處にある。

あつたらはつきり言へど、言葉の行掛りで言ひましたら、彼奴臆面もなく、正さん
の所へやつて呉れと言ふのです。

流石の私も往生しましたよ。」

「何故でございますか。」

「何故つて貴女、

考へて見て下さつても分るぢやありませんか。

今の太塚さんの所とは、天と地といふよりもひどい差があります。

正のうちと言へば成程昔は可なりの物持で、この村でも相當幅も利かしてゐました
が、親父がすつかりやり損つて、破産して終つたのを、うちや親戚が取り持つて、ご

うやらかうやら家屋敷だけは残してあるのですが、まだ親の時代の借金が返し切れな
いのを、子供の癖に、親の借財は子の借財だ。財産の相続を受けるだけが子の道ぢや
ない。

父の借金は私が働いて返します。

なごと言つて、借金を參千圓も背負ひ込んでゐるのです。

こんな田舎の百姓位では、うつかりすれば、相當得があつてもやり悪いのに、參千
圓の借金を、背負つてあの見切りの家の田畑だけで、どうして暮しが立ちますか。
それに正は頭が良かったから、中學へも優等で入つたから、相當に役に立つ人間に
なるかと思つてゐましたが、父親が死ぬと、何と思つたか、學校を止めて、病人の母
親を年若い妹に委せておいて、四年間も静岡邊りへ行つて、理想農業の經營を覚え
て來たと、偉さうな事を言つてゐます。

けれども今迄自分の畑で、大根一本茄子一つ取つた事もなく、あの通り畑も田もや

せて終つてゐます。

それから又二年も兵隊に行つて、近衛騎兵の、上等兵になつて歸つたと威張つてゐますが、それで飯を食ふ種が出来たといふぢやなし、これから荒れた田畑を起して、百姓で暮しを立てるつもりか知れないが、他所から見ると、莫迦々々しくて物も言はれません。

あんな奴の所へ、嫁に来た者は、一生に一度だつて、體を休める事も、仕合せなんて言ふ事は、全くある筈がありません。

人がお祭りに行く時も、芝居に行く時も、いつもぼろを着て、破れ草履をはいて、汗をかき乍ら一生懸命働いて、人から見下げられなければなりません。

親も兄弟もない様な孤兒かなんかなら、あんな所へ来て働く娘もあるか知れんが、親や兄弟があつたら、決してあんな所へやる氣遣ひはありません。

それに千恵子はどう考へ違ひをしたのか、又は正にうまく誘惑されてゐるのか、又

は私達を厭がらせのつもりでかさういふ事を言つたものですから、ついむか／＼として思ひ切りぶん殴つたのです。

それで今朝も何だか愚圖々々してゐましたが、嚴しく叱りつけて親の權利で決めて終ふと、詰めつけてやりました。

すると何とも言へない、まづい顔をしてゐましたが、ふとゐなくなつて終つたので、若しかしたら、先生の所へでも、お邪魔してゐやしないかと思つてお尋ねに上つたのです。

と言つて、初めて、前に出されてあるお茶をごつくりと一息呑みました。

金か眞心か

芳野先生はわざと形を改めて、神林の顔をちつと見詰め、敬虔な態度で、

「お話しはよく分りました。」

貴方のお心持も充分了解させて頂きました。

人には各々人生の観方といふ事については、主義がありますから、自分がかういふ風に思ふから、お前もさういふ風に考へて進めと言はれましても、誰もがその通りにする譯には参りません。

同じ様に動いてゐる様でも、心の持ち様に依つて、同じ物でも、非常に価値ある様に見えたり、無価値な様に見えたりします。

悲觀的に見るも、樂觀的に見るのも、之皆心の持ち方一つで、外觀から見た境遇で本當の幸福を判別する事は出来ません。

今度の千恵子さんの事件に就ても、多少私にも責任がある様に、貴方も仰有いましたし、又それが事實の様にも思ひますから、その責任者として私は、私としての腹藏のない意見を申し上げて見度いと思ひます。

千恵子さんの重大な事件を解決する一つの方法として、御迷惑でも一應私の考へて居ります人生觀を、聞いて頂き度いと思ひます。」

「伺ひませう。」

「貴方は生みのお父様としての、絶對の權威と慈愛を持つてお出でになります。私は教への母としての、絶對的の責任ある慈眼を持つて居ります。」

その二つの立場にある貴方と私は、丁度人生觀を正反對に持つてゐるのも、眞に不思議に思ひます。」

「それは違つてゐませうなあ。」

職業としての立場からの責任を持つ貴女と實際の親としての立場は、大變違ひますからね。」

「いゝえ、さういふ意味ではございません。」

私の申上げるのは、根本問題です。

貴方はこの世の人の幸福を、悉く物質の上に御覧になつて見えます。

私は精神の方面に重きをおいて、居ります。」

「それが貴方の主義である事は知つてゐます。

しかし人間である以上、生きて行かなければならないので、その必要上、物質が豊かに恵まれてゐなければ、安樂に生きる事は出来ません。

だから物質を離れて幸福なんてあるものぢやありません。」

「その見方が大變に、私の考へとは、違つてゐる様に思ひます。

私はもつとぐつと根本に溯つて、人生といふものゝ、價値を考へて見度いと思ひます。

無遠慮に申しますから、どうぞ貴方の事であるとか、他の方の事であるとか言ふ様な、問題ではなく、全般的に考へて見て申上げる事でございますから、その邊よろしく御了解下さいませ。

人は様々の境遇に依つて生活して見えますから、職業も地位も資産學力といふ様なものは千差萬別でございますけれども、どんな人でも生れて來る時には、何もそれこそ塵埃一つ持たずに生れて參りました。

産聲を上げてから後に、人に依つて色々な名前や地位をつけたり、祖先の財産をそのまゝ譲られる人もあるし、自分の力で作る方もございます。

けれども何れの形式に致しましても、色々な因縁關係から、一時的にその人の所有であるといふ事に名はついてゐても、それは假りのもので、どんなに大切に思ふものでも次の世迄持越せるものは一つもありません。

自分の體さえ、この世において行かなければなりません。

さうして見ますと、目に見える財産といふ様なものは、多い少いに依つて、濫りに樂んだり喜んだりするのは、變な事の様思ひます。

自分で土一掴みでも作れるものではなく、どんな小さな目に見えない程の、野の草

花だつて、人の力で勝手に生やす事も、花を咲かせる事も出来ません。

一切の事がその通りで、農夫が種を蒔いて、肥料をして、懇ろな世話をしたと言つても、それは作り主としての努力をしただけで、それに自然の力が加らなければ、五穀野菜その他、ごんな草や木も、榮える事は出来ません。

その他野獸、鳥類、蟲類、魚類等でも、自分の力で勝手に生れる事は出来ず、自然の力で生れ、自然の力に養はれてゐるのですから、考へて見ると、地上一切の萬物は皆自然の力に依つて生きてゐるのだと思ひますと、人が變な慾心を出して、濫りに、自然の御所有物を、自分のだ人のだと、勝手な事を言つて、奪ひ合ふのは、天に背く行爲ではないかと思ひます。

それが本當の仕合せになれ、ばいゝのですけれど、物持になり度がつて、慾心を出して、色々金や品物を掻き集めて、自分は長者だ物持だと得意になつてゐました所が身の養ひに、必要以上に、餘分に食べられるものでも、又澤山着られるものでもあり

ません。

澤山財産や道具を持ち過ぎる人は、餘計に支配するのに、氣苦勞が多いと思ひます。

それがために、種々様々な用件が多くなつて、人一倍餘計な苦勞をしなければなら

ないだらうと思ひます。
それに財産とか地位とか、名譽といふ様なものは、常に動くものでございまして、いつもその人について、その人の幸福を齎らすものとはばかりは決つて居りません。所有者の身持が悪くて、徒らに消費するといふ様な場合は、別と致しまして、ごんな躓づきから、大きな資産家も倒れて、無一物にならないとも限りませんし、名譽とか地位とかいふ様なものも、その人の得意の時には、非常に結構でございしますが、何時自分の身から失はれて行くか分りません。

これは人の力ではなく、天のお心でございますから、逃れようとしても逃れられない、天命とも申されませう。

鳥や野獸や昆蟲類などは、昨日の事も繰返さず、明日の事も考へません。

とても朗かに、自然に委せて、その生活を單純な心持から、充分に幸福に生きて居ります。

人間だけが、餘りに物質にこだはつて、自分から勝手に差別を立て、小さな世界に閉ち籠つて、絶えず争闘を續けてゐます。

これは決して正しい生き方でないと思ひます。

人は誰から教へられなくても、大地の上に出て、のんびりとした心持になつて働けば、體も健康になつて愉快でございます。

食物にしましても、よく働いて、胃腸がよく消化すれば、何でも美味しく頂けます。何によらず飲み物、食べ物、本當の味ひは、汗を流して眞劍で働く人の外は、その味の旨さを味はふ事は出来ません。

それに人ばかりではなく、鳥獸類初め、草花の様な、無心である者にでも、懇ろに

して、慈悲慈愛の心を以て、働つてやるこいふ事は、言ひ知れない喜びを感じますが、無慈悲な事をした時には、何となく暗い淋しい心持が致します。

同じ手足でする事でも、蹴たり踏んだり、人の頭を毆つたりしたら、誰も咎めなくとも、向ふが服従してゐればゐる程淋しい心持がして、氣が咎めます。

同じ口で言ふ事、目で見える事でも、素直な優しい心持で、相手に優しく話かけ、慈悲で見ると、恐ろしい言葉で罵つたり、凄い目で睨みつけたりしますと、相手が恐れ嫌つて、その人を避けやうとします。

又そんな事をした本人の氣持は、決して朗らかなものではなく、何となく淋しい暗いものだと思ひます。

かうした事實から考へて見ましても、自然は愛であり誠であり、正義であると思ひます。

ですから總べての生活は、天の御心に叶ふ方法で、眞心から正しく、自ら清らかな

汗を流して、働らいて生きるといふことが、本當に正しい生き方だと思ふのでござい
ます。

汗を流して働かないで、色々な策略に依つて一攫千金を夢みてゐる人を、世間では
偉い手腕家の様に思つて、賞める方がございますが、私はさうは思ひません。

地上の人類に平等に與へられた天の徳を、不自然な方法で奪ふ事になりますから、
その奪つた寶を、自分の勝手な事に使つて、廣く世の中の事に働かせなかつたならば
それは世の中に對して、大きな罪惡を犯してゐるのだと思ひます。

さういふ風に何となく、怖ろしい事の様に見えてなりません。

私は常々かういふ見方をして居りますから、物持の方でも、本當に深い御信仰を持
たれて、天に代つて、總べての人の幸福のために、働かせるのだとお考へになつて、
物資をお働かせになる方は、本當の人格者だと思つて、心から尊敬し、感謝する氣持
になります。

けれどもさうでない、小さな利己主義に心が迷はされて、天の心に背いてゐる行ひ
をなさる方を見た時は、何となく可哀さうな人だと思ひます。

折角與へられた人間の徳を、我れと我が身から、捨て、お終ひになつて、幸福でも
何でもないものを、命懸けで掴んで喘いでゐらつしやる、馬車馬の様な方を見ると、
泣けて來ます。

それと反對に、地位や名譽といふ様なものは、何もなくても、しつかりとした眞心
があつて、健康な體を與へられて、大地にしつかりと足を踏みめめて、自然の天地と
共に、正しい心で汗を搾つて、働らいて生きる人の姿を見ると尊いと心からおもひま
す。

それは自然の懷へ徳を積んでゐらつしやるのですから………。

人に預けた徳はどうかすると、奪はれる事もあります。天に預けた徳は決してさ
ういふ事はなく、正しさも誠の行ひも、汗も涙も、みんな天は徳にして返して下さい

ますので、人に對して之を行へば、信用となり、動物に行へば懐かれ、野の穀物や野菜に行へば、真心の及んだだけ、よい花とも實ともなつて報いて呉れます。

今貧しくても、眞剣で働けば、金も出来借金だつて返せばなくなり、信用も出来れば地位も出来、名譽も出来て來ます。

いつまでも貧乏でなければならぬといふ様な約束は、誰もしてゐる譯ではありませぬから、その心掛一つで、有る物も失ひ、無い物も得るといふのが、尊い天の攝理だと思ひます。

かういふ點から私は、人生の幸福は、借りた衣裳の、財産地位名譽でなく、天から頂いた真心の眞珠であると思へて居ります。

「さう仰有れば、そんな風に考へられない事もありませんなあ。しかしそんな風に考へてゐる人は實際は少いんです。」
「でも私ははつきりと、さういふ風に考へて居ります。」

そして今度は、結婚といふ問題に就ての考へ方に就て申上げて見ます。

従來の結婚は、息子や娘が年頃になると、親様が一生懸命に心配して、配偶者をお捜しになるのは、大變に尊い様に感じますけれども、その方法がどうも間違つてゐる様に思ひます。

大抵の親様は、やり度いと思ふ先様の、名譽とか財産とか、主に形式的な事に重きを置いてゐらつしやいます。

又お貰ひになる方でも、嫁に來る人の持つて來る釣物の事などを、條件にして考へて、その中に仲人といふ様な人が入つて、何方へも半分位は嘘で固めても纏めやうと努力する様な關係上、ごちらにも可なり矛盾がございますして、本人同志の心持とか、體質の事などは、殆ど考へてゐられない様でございます。

そして唯表面だけを、簡単な形式一遍の見合位で、纏めようといふ様な、亂暴な結婚が行はれてゐます。

ですから本人同志の意志が弱ければ、結婚はまるで籤を引く様なもので、一生の不幸の札を引くか、幸福の札を取るか、結婚して終はなければ分らないといふ様な滑稽な有様でございました。

若し不幸な籤を引き當てたら、一生の悲惨はお話しになりません。

結婚して、一生夫と頼る人が、品行が修らない道楽者で、家を外にして、遊び廻つて、湯水の様にお金を使ふだけならまだよろしいが、萬一怖るべき性病などに罹つて来て不幸にも奥さんに感染させた様な場合は、罪のない可愛い子供まで、怖ろしい病毒を生みつけて、子孫まで全滅するやうな悲しむべき事になります。

家庭もそれがために、暗い冷いものになつて、妻は淋しさと惱ましさに耐へ兼ねてヒステリーに陥つたり、家の中にいつも病人が絶えなかつたりして、不幸な家庭になつて終ひます。

こんな事では、幾ら富があつても、雪の様に消えて終つて、いつも惱ましい感じの

中に、苦しまなければなりません。

反對に又折角選んで貰つた嫁さんが、性質が暗い陰險な人であつたり、體が弱くて家庭の主婦としての働きも出来ない様な人でしたら、ごれだけ衣裳を澤山持つて來られても、決して家庭の幸福にはなりません。

かういふ人達が形式だけに依つて、結婚して、人から目出度がられて見た所が、實際の生活に於ては、ちつとも夫婦としての、眞の魂と體との徹底した協力が出来ないで、夫婦とは名のみで、てんでに勝手な事をしてゐたのでは、ごれだけ澤山の子供が出來ても、本當の夫婦ではありません。

妻に不満を抱いたり、夫に頼りなさを感じたりして、不満を訴へ合つたり、不足を言ひ合ふ様な夫婦の間に生れた子が、どうしてしつかりした愛情に富んだ、確實な信念を持つ、健全な子になりませう。

こんな夫婦の力で、本當の富や、幸福な家庭が築き上げて行かれる道理はありま

せん。

かうした無理解な結婚は、甚しい罪惡でございます。

それで私は思ひます。

子供が生れて来る来ないといふ事は、親の自由になるものではありません。

因縁があればこそ、神様は御自分に代るべく、その親を選んで、尊い慈悲慈愛の心を授けて、生ませて頂いたのでございます。

して見れば親は、神様に代つて生み育て、下さる、生き神様ですから、理窟なしで感謝し、親に對しては理窟なしで、真心を盡して孝行を盡さなければならぬ義務はあります。親として自分達の子だから、何も一切自分達の權利で、思ふ様にするといふのは間違つて居ります。

子供の持つてゐる魂も目的も、天が授けたものを、親は忠實に之をお手傳ひして之を養つたといふ責任者であるといふのが事實であります以上、結婚といふ事は、天

の心で定められてありますから、本人と本人が、結んで頂いた因縁のある同志が一緒にならなければ、夫婦の資格は出来ません。

愛する者同志の堅い信と愛に依つて、魂が固く結び合ひ、その肉體と肉體が、徹した愛の中に、固く結合されて行くのでなければ、一心同體といふ、本當の夫婦生活は營まれません。

夫婦の間には、紙一枚の隔りがあつても、協力一致の力を缺きます。

かういふ點から私は、結婚に限つて親は、唯大きな愛の眼を以て、保護するだけに止めて、財産の有無といふ事は問題外において、本人同志が精神的に、相愛し相信じ協力して、圓滿な夫婦生活を營む事が出来るといふ見込がいたら、快く許して、一緒にさせて上げるのが正しいと思ひます。

かうした協力した相思相愛の夫婦の協力の中からこそ、本當の正しい富も地位も名譽も生み出されます。

それよりも尙かうした、徹底した純真な愛に依つて、結ばれた両親の中からこそ、本當に愛情も強く、人格品性も完全に備つた、身心共に健全な子が生れて來るのだと思ひます。

夫婦愛の徹底しない、冷い家庭は暗く陰慘です。

嫁姑の間も圓滿に行きませんし、兄弟とも親しく出来ません。

いつもかくし事、疑ひ事、嫉妬といふ様な、感情からの争ひが繰返されて、家庭は段々暗く冷くなります。

こんな家庭に生れた子供が、純真で朗らかな、明るいよい性格に生れ又育つて行く筈はございません。

かういふ點から考へて見ますと、人の幸福といふものゝ總べての源は、夫婦愛の徹底より外にはないと思ひます。

ですから實際的に相愛し、相信し得るお互同志でなければ、結婚する事は、罪惡だ

とさえ思つて居ります。

殊に今迄とは違つて、世の中の事が進んで、様々な事に頭を悩まされる時代になりました、先づ何よりも、その難關を押切つて行くには、夫婦愛の徹底した、協力の外はないと思ひます。

世の中には夫婦と言つて、三十年も四十年も生活してゐても、本當の夫婦になり切つて終はないで、最後まで他人で終つて終ふ様な淺ましい、不幸な家庭が可なり多い様なので、お氣の毒に思つてゐます。」

此處まで言ふと、今泉は何事か、非常に感激を覺えたのか、

「先生、一寸お待ち下さい。」

三十年も四十年も連れ添つても、本當の夫婦になり切れないのが、本當にあります。現に私のうちがさうです。

家内は悉く私を向ふへ廻して考へてゐるし、私も亦家内の缺點ばかりが見えて何

一つ家内の人格を認めて、うちの事でも子供の事でも相談し合つて、した事はないのです。

これはごちらに缺點があるのでせう。」

「それはごちらにといふ事はなく、それが本當でしたら、貴方にも奥様にも、半々の責任があると思ひます。」

失禮ですが、初めはごういふ動機から御結婚になつたのでございますか。」

「矢張り今貴方が仰有つた様に、親が大體決めて、一度見て来いと言ひますから、一度見合ひして、これならよからうと言ふ様な考へで、親の言ひなりに貰つて終つたので、形式は貴女の仰有る通り、具合よく治つてゐるのですが、ごうも私も、妻も心から愛するといふ氣持になつた事もなく、妻も亦私を眞に信じた事はなく、一寸外所へ出て遅くなつても、つまらぬ所で遊んで来たのではないかといふ様に疑つて、愚痴をこぼすので、よく叱りつけたもので。」

女といふものは、よく涙を武器にして泣くものですから、實際うるさくおもひました。

その中に子供が段々生れて来るのに、親達や兄弟とは段々氣まづくなるし、押は強くなるし、體は段々取り亂して、變な恰好をしてゐるし、食物だつて、口に合ふ様なものを拵へて食べさせる腕前はなし、その上二口目には、實家へ歸る／＼と始終風呂敷包ばかり引張り出して脅しつけるので、女程厄介なものはない、

これは無教育なためだらうと思つて諦めて終ひ、終には家内みたやうなもの自分のためには厄介ものだ。

唯子供を生む道具みたいなものだから、放つておいてやればよいといふやうな氣持で外へ行つては、家で満たされない淋しさを、外の女に求めて、不満を慰さめてゐました。

現に私は女を外に圍つてゐて、月々相當の仕送りもしてゐますし、子供も出來て

ゐるのです。

家庭といふものは、何處でもそんなもので、女といふ様なものは、大抵似たり寄つたりのものだと思つてゐました。

同じこと苦勞するなら、貧しいうちへやつて、惨めな思ひをさせるより、せめて物質だけは充分恵まれて、不自由しないところへ片付けて、女特有の虚榮心でも満足の出来る様なところへやり度いと思つて、千恵の事も實は考がへたのですが、今のお話を承はつてゐる中に、ごうも私の考がへ方が違つてゐたような氣がしますから少し考へ直さねばならぬ様に思ひます、

そして私の家庭に於ても、妻と結婚以來、全く間違つた生活をして來た事に氣がつかしました。

ごうして私達は初めから、本當の愛を以て、協力して本當の一心同體といふ程の徹底した夫婦になれなかつたのでせう。」

「遠慮なく申上げますと、それは貴方が初めから、ごうせ女を貰ふのだからといふ様な單純な考へからお貰ひになつたのと、奥様は一度は行かなければならないから、何處へ行つても同じ事だといふ様な考へでお出でになつたのと、お考へが一緒になつて、さうした氣紛れの御夫婦が出來上つたゝめに、御夫婦といふ名前だけで子供さんをお生みになつたり、一緒に御生活をなさつたので、お心は本當に淋しい他人同志の様な歩み方をなすつたのではないでせうか。

しかしそれでしたら餘り無残ですから、今からでもお改めになつたら如何でせうか。」

「さあ、ごうすれば直りませうか。」

「それは初めから、相思相愛の仲でない以上、根本的に徹底した夫婦の愛情を、結び交すことは出來なかつたとしても、この妻を又この夫を、天が唯一人だけ、私のために、授けて下さつたのだから、假初にも外に心をうつさないで、命のある限り頼り愛して行かうと、眞劍な氣持で協力して行けば、その中には本當に信頼も深くなつて

終ひには、本當の一心同體になり切れて、お互が相手の胸の中に住み切つて、別れく
になれるものではありません。

夫婦生活が、そこまで圓滿に幸福に營まれて参りますならば、その他の一切の問題
は、平和の中に處理されて、總べてが理想化されて、本當に威信あり力ある家庭が出
来るのだと思ひます。

私自身の事を申しますと、大變に變でございしますが、主人が存命致して居ります間
も主人はよく私を理解してゐて呉れまして、私も絶対に信賴して居りまして、絶
對に私共の間には、秘密といふ様な事はございませんでした。

みんな打明け合つて、二人共がそのまゝの心持で過しましたので、他所様の様に、
お互の品行や素行を疑つて、嫉妬心を起すとか、不安を感ずるといふ様な事は一切な
く、本當に信じ切つた、平和な感情で満たされて居りました。

それですから、主人が亡くなりましてからは、人様は淋しからうなごと仰有つて下

さいますが、私は決して主人は亡くなつた様な氣は致しませず、何時迄でも生きて居
て呉れる様に思つて居ります。

それですから、何か自分に思案に餘つた時は、ちつと心をすましてゐますと、主人
がすぐ目の前に現れて、その道を教へて呉れますのでございします。

それに三人の子供達の、何れを見ましても、本當に主人の尊い遺身だと思へば、非
常に尊く思はれまして、どんな犠牲を拂つても、主人が心から喜んで呉れますだけの
者に教育しなければ、申譯ないといふ、斷ち切れない愛情から來る、深い責任義務觀
念のために、常に弱いながら、雄々しい氣持になつて、幸福に生きてゐるのでござい
ます。

これを思ひまして、私は常に、夫婦愛は二世といふ事は、誠の言葉であるといふ事
を深く感じて居ります。「
「いや、全く御尤もです。」

貴女も世に稀な賢夫人ですから、さういふ風に御幸福な生活がお出来になつたのです。又先生も稀な人格者でありましたから、さうしたお仕合せな御家庭が營まれたのです。

それに比べますと、私共のうちは、まるで家庭ではありません。

全く野獸の集りの様なもので、皆てんで勝手な事を言ひ合つて、家族一致なんて平和な氣分に浸つた事はありません。

この原因は夫婦生活が、徹底的に營まれてゐない結果だといふ事を聞かせて頂く成程と思ひます。

私も二十年前に、さうしたお話を聞いてゐたら、考へ直す事が出来たのに、惜しいことをしました。」

「いゝえ決して今からだつて、遅いことはいけません。

寧ろ今からこそ、最も大切なのでございます。

お子様方が、皆夫々將來の御方針や、御縁談をお定めになるお大切な時ですから、御両親様が、誤つてゐたといふ事は全部御改革になつて、御自身からお手本を示してお導きになるといふ事は、最も効果がございます。」

「全くさうです。

よく考へて、これから私も、出来るだけ家庭の改革に努力して見やうと思ひます。」

「私の様な愚か者が申上げました事を、貴方様方が、そんなに迄御共鳴下さるなんて本當に有りがたいことでございます。」

「いや、誰方からお話を聞いても、道理に二つはありません。

幾ら男子が横暴を極め、是を非に枉げて、横車を押しても、主人といふ立場の權力で家庭内の者位は無下に押へつけても、心を従はせる事は出来ません。

まして世間へ出れば、横車は誰も通して呉れません。

それに反して、誠の話は、表面では貶したり笑つたりして、何でもなくあしらつて

ゐても、心では敬服して、自分の心の中では、頭を下げてゐますから、眞理だけが絶

對的の幸福の王者といふ事は、間違ひではありません。

何も彼も、善も悪も分つてゐてやらないのが、世の中の人心です。

殊に男といふものは、變な意地があるもので、そのために自分だけでなく、人をも不幸にして、進んで偽つた道を、暗く歩いてゐるのです。

全く誰もが考へなくてはなりません。

其處で先生、

色々お話を承つて、私も大變頭が明るくなつた様な氣がして、今なら餘程正しい意志で決斷が出来さうに思ひます。

問題は外に誰彼がといふ、責任者がある譯ではありません、要する所は、私の腹一つで決ることですが、千恵子の縁談は、ごういふ風に解決するのが良いと、先生は思つて下さるのでせうか。

ご先生の心の奥を探る様な目付で、ちつとその瞳を見凝めました。

「左様でございますね。」

私は今申し上げました通り、人生の使命と幸福は、最もよき健やかな正しい魂と體にあると信じ切つてゐます。

それですから、物質や地位を目的とする縁談にはごうも、賛成が出来ません。

例へば千恵さんが、岡山さんへお出でになりましたも、傍から見れば、何の不自由のない御生活で、御仕合せだらうと、羨まれる様な御生活も出来ませう。

日髪日化粧で、氣儘な日送りも出来るかしれません、そんな事は、馴れて終へば何の喜びでもありません。

その内面には、身を削る様な惱ましい辛い幾日か、屹度待受けて、一生不幸な年月に惱まされ通して終る様な事が、ないとも限りません。

お金が何百萬あると仰つた所が、それは向ふ様の財産で、貴方のものでもなければ

ば千恵さんが持つて行かれたものでもないので、壹圓の金も自由に使ふ事は出来ません。

もとより家の中のものなど、一物だつて、千恵さんの氣儘には出来ません。

唯あるといふ、優越感だけに、自己満足をして見る位が、關の山だと思ひます。

その財産があり餘ることが、ごんな禍を起し、家庭に悲しみを取り入れるかと思ひますと、向ふのお婿さんといふ方も、却々の秀才で、間に合ふ方ださうですし、學校も立派な學校を出てゐられるのですから、充分手腕を振はれて、社會的には、相當尊敬され用ひられる地位は占められる事と思ひます。

けれどもさういふ方の境遇や心持は、自然に或る方面に力が伸びて、相當さういふ方面に持つて囃されるに決つてゐます。

色々な女性に近づきが出来ますと、奥さんの存在が、それ程尊くも見えなくなつて何時かは床の間の置物位に、軽くお考へになつて、ごんなに大切な家庭上の問題でも

眞面目に御相談もなさらず、暴君振りを恣になさる様な事になるとしたら、ごんなものでせう。

殊に千恵さんが、この結婚に同意されて、先方のお婿さんとも、充分御諒解も出来意志の疎通も出来た、親愛な間柄であつたなら結婚なさつても、夫婦生活なども、周囲はごうあらうとも、理想的に續けられて、御幸福な日々を送られる事が出来ませう。けれどもそれと反對に、この縁談には千恵さんは絶對反對で、勘當されても殺されても厭だと言つて居られます。

それを親の權利で、無理に縛り絡げた様な事をして上げても、結果は屹度よくないに決つてゐます。

そんな事になれば、向ふ様へも大變な御迷惑をかけますし、貴方の方にも取返しのできない御損害と、不名譽を蒙られる事になります。

ですから私はこの縁談は、全然お取り止めになつた方がよいと思ひます。